

波之鳥

第18号 1997



室蘭市医師親交会誌

波ノ鳥

第18号 1997

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙 凍寒 加藤 治良
 カット 斉藤 美知子

随想

サンチャゴ・デ・コンポステラ 横山 洋子 1
 老医の昔ばなし 就 鳥 生 14

短歌・俳句

追 憶 曾根 清孝 17

座談会

残しておきたい言葉・風習 19

曾根 清孝・山本 俊一
 東 浩・斎藤 成樹
 編集委員（加藤・村井・上田・澤山・大久保・三村・斉藤）
 事務局（高橋・小杉）

あんらくいす

二人の愛刀家

東 栄先生と山岡上野

To be, or not to be.

マラウイ通信(娘からの手紙)その二

平成九年度MMMCドライブ会

福永 純

千葉 壽良

上田 智夫

大久保 洋平

塩澤 英光

32

新会員・自己紹介

千葉泰二・大平整爾・大宮彬男・松田史明

53

編集室へのお便り

親交会の主な行事

会員異動

編集後記

大久保 洋平

60

58

サンチャゴ・デ・コンポステラ

横山 洋子

(市立室蘭総合病院)

ものごころ付いてより頭を離れなかったのは「何故わたしはここにいるの？」でした。1943年東京・堀之内の生まれ、東京大空襲の火の海を祖母の背中で逃げ惑い、練馬大根の土地・母の実家に避難して、信州・野沢に疎開。世田谷の宇野良田なる土地に開かれたマツチ箱団地に落ちついたのはもうじき満四歳という頃、畳の青さとその香りを憶えているような気がします。

桧の湯船に浮かぶ大きな葉草の袋、腰を屈めて潜り戸から入る黒い大きな御門、二つ年上の姉とひとつ床に寝ている頭の上の天井には上げ蓋があつて、梯子をかけて上があればその向こうには恐ろしい大男が住んでいるのだとか。「荒神祭り」は子供たちの無事息災と学業成就を祈るお祭り、見たこともないご馳走、美しい花柄の塗り物のお椀と切り子のギヤマンや久谷の金欄手、美しい器の数々。姉と駆け回って干し柿の

串を踏み抜いてしまった足の痛み、化膿した足が炬燵にはいる度に疼く切なさ、練馬から戻ってきた母が裁ち鋏を焼いてオデキを切開してくれたときの生き返る解放感、等々。―疎開先の庄屋さんのお屋敷での記憶の断片はもしかしたらもう少し成長した後の刷り込みなのかもしれません。でも私の「私の走馬燈」の最初の画面です。或る日、用水路の辺りで遊んでいた私は、突然何を思ったのか祖母の丹精の刺し子の足袋を脱いで、何と、その流れに放り込んでしまったのだそうです。古き良き信州の用水路の清冽な流れ、これに乗って走る「花色木綿に赤糸の刺し子の足袋」、この心象風景は「私」の原点として生涯の宝物です。

軍服姿で帰還した父の姿は画面の背景として在り、この後半世紀の今に至るまでごく偶に、ごく静かにのみ登場します。しかし、ここに流れる小さな交響詩の通奏低音は彼の、その娘に寄せる深いまなざしと祈りであるかと聴こえます。

十数年も前のこと、自主研修旅行、いわゆる「ウマニンジン研修」の機会に恵まれ、ヨーロッパ各地の病院と教会を訪ねました。「ホスピス」を、差し迫った死を従容として受け容れるひとびと、その人々のための施設医療を支持する社会、そんな風土に憧れるからです。「この頃のお年寄りって、亡くなった家のお爺ちゃん・お婆ちゃんとは随分違うみたい。死ぬことは敗北することって悔しいことなんだって思っているみたい」「そんなことなら安心立命なんて有るわけがないじゃないですか」と「お見送り」の難しさに悩んでいたからです。ここには「死」を「穢れ」と結びつけて「差別」する風土が

あると感ぜられたからです。

「私にはもうすぐ迎えが参ります。お世話になりました。ありがとうございました」は「月の世界」からの「お迎え」を待つ「かくや姫」ですが、このような「別れと旅立ち」が少し前までの日本人の「死」のイメージでした。従容として「お迎え」を迎えることが人としての理想であり、覚悟だったのです。心やすらぐ「浄土」をみずからの内により豊かに築き上げるための様々な営み―写経を納め、菩提寺を美しく荘厳し、灯籠に明かりを入れ、或いはより深く響く鐘を求め、こうした「あの世に身を置く自分との対話」はひととして在るための基本的な教養でした。「お迎え」とは、この世を遠く離れた「浄土」から旅立つ者を迎えとりに来る尊いお使者のこと、或いは「このお使者をお迎えする場面」を指し、この上ない特別な意味を持つ言葉だったのです。でも今はどうでしょう、「お爺ちゃん、お迎えに来ましたよ。レントゲン写真を撮りに行きますよ」と車椅子を押す若い看護婦さんは多分「お迎え」の本来の意味をご存知ないのです。

ひたすら「科学」と「医療」に帰依するひとびとはその霊験のあらたかなことを疑わず、病院選びやクスリや健康法のみが最優先課題です。祖父母は確かに持っていた「安らかに死ぬための文化」、卒業したての四半世紀前には時には立ち合わせて頂けた「安らかな死」。「お迎え」を見据えて生きる心深い文化は、この大量消費社会、物とお金の文化の中ではほとんど忘れ去られてしまったかにみえます。「死に向きあう文化」の衰退を嘆くとき、「十字架」の形で日々死を見つめて生

きる人々の土地は、憧れずにはいられません。死を見つめることはより心深い生を動機づけてくれる筈だからです。

ひとが最も人らしく在ることができるのは、生きるための雑事を離れて「自らのものとしての死」を見据えるときです。自らを日常から切り離すことで「死」を予備体験し、ここから「生まれ変わりたい」と祈り且つ歩く営みが巡礼であると云えます。

お大師さまと「同行二人」の傘で行く四国巡礼のように、カトリックのひとびとは聖ヤコブのシンボルマーク・帆立貝の貝殻を首から下げ、杖につけてイベリア半島西北端の聖地サンチャゴ・デ・コンポステラを目指します。夏休みにはパリ大学の学生を中心にいくつもの巡礼団が組織され、黒い僧服の先達に導かれて全行程を歩き且つ祈ります。帆立貝の形をした洋菓子・マドレーヌは、この巡礼路にあたる南フランスが発祥の地で、その昔、成田山の羊羹やお伊勢さんの赤福のような旅の名物であったといえます。この地の生活文化に占めるサンチャゴ巡礼の深さが推測されます。

サンチャゴ空港へは中南米の諸都市から日々直行便が乗り入れ、首にかけたカラフルなりボンに帆立貝をつけ、華やかな民族衣装に着飾った善男善女の団体客を送り込みます。大聖堂に隣接するスペイン有数の最高級ホテル、ロマネスク・ゴシックとバロックの様式が混在する荘重華麗な建物は、その昔、旅に病んだひとびとのために設けられた王立救護院であるといえます。

聖地巡礼は、ローマ教皇が聖俗の最高權威として君臨した西欧中世には制度として存在し、「島流し」に類する科刑の形態としても営まれたのです。巡礼路には教皇直属の軍隊も置かれたが、巡礼者保護のためよりは反体制分子を取り締まるためであつたかも知れません。

刑の宣告を受けた者は家財を処分して路銀とし、帆立貝を首から下げて歩き出します。帆立の貝殻は托鉢僧の鉢のように水や食物の容器として用いられたのです。帆立貝の道標が導く巡礼路の「宿場」は教会や修道院ですが、彼がベッドを貰えたとは思われません。野を越え川を渡り、そして雲に包まれるピレネーの山地に入ります。悪路の厳しい登り、盗賊や狼に襲われる危険、来る日も来る日も命を的にひたすら聖ヤコブの眠る土地を目指して歩くのです。

途中、ピレネー山麓の石切場からは可能な限り沢山の石灰岩の碎石を肩に担ぎました。サンチャゴ大聖堂造営のための喜捨です。檻樓切れのように疲れはてて堂前に辿り着き、最後の力を振り絞って石段を上がり、本堂の奥に聖ヤコブの黄金の像を礼拝します。ここで赦免状を頂き、これで天下晴れて故郷に戻るのですが、力尽きて息を引き取る者も稀ではなかつたといひます。

サンチャゴ巡礼を納めたものにはこれを示す称号が与えられましたから、社会的地位のためにこの道を行くお供付き、馬付きの裕福なひとびとも、勿論、真に「天国」を希求する敬虔なひとびとも少なくはなかつたのでしょう。サンチャゴ・デ・コンポステラとは、「星の野の聖ヤコブ」の意、十二世紀には西欧全域から毎年五十万人もの巡礼者がピレネーを

越えたのだと云います。

私もここを目指して西欧古寺巡礼の旅に出ました。

飛行機を降りてフランクフルトは雨の中、ラインは濁って流れ、軍需物資を運んでいるのであるというネズミ色の巨大な艀船が切れ目なく続きます。子供の頃から暖めていたイメージとは随分違うラインですが、葡萄園のゼクトと生ハムで元気が出ました。ゲルマニアと呼ばれたこの土地に最初の葡萄園を作ったローマの駐屯兵たちを想像します。

帝政ローマの末期「民族の大移動」の混沌の時代、戦いに明け暮れて疲れたゲルマンの君侯たちは、やがて調停者としての「神」の機能に着目し、ローマ教皇を精神的盟主としました。しかし帝国分裂後瓦解した西ローマ帝国の遺産をめぐっての君侯たちの対立抗争は教皇の權威を拡大する結果となり、当時唯一の知識集団であつた「教会」は「神」と世俗の「法」を独占しました。ついには「神の代理人」として教皇自身が「法」であると主張するに至るのです。

教会からの「破門」とは「法の保護」の枠外に置かれることで、生命・財産の保障を解かれることを意味しましたが、十一世紀にはローマ教皇權は、ゲルマン諸侯の世俗の盟主である神聖ローマ皇帝をさえ破門し得る聖俗の最高權威、「地上の神」にまで肥大してしまつたのです。

「神の代理人」は「神の国」を地上に具現するため、各地

に大学と修道院を建設しました。官僚養成、生産技術研究とその普及をはかり、可耕地拡大のための大開墾運動を展開するためです。「神さまの思し召し」は辺境の民にも伝わらなくてはなりませんから、交通網と宿泊施設を整え、旅人の安全をはかることも各地の教会・修道院の大切な仕事でした。制度としての福祉と医療は修道院運動に始まるのだといえます。

青い空の下ミュンヘンからウィーンへ、南ドイツとオーストリアの緑の平原を走ります。ミュンヘン郊外の家庭菜園団地では子供たちがビニールプールで大と水遊びをしています。ビキニ姿で果樹の手入れをする金髪美人もいます。憧れのドナウのほとりには広大な白亜の宮殿建築、これも修道院であるといえます。モーツアルトの生地ザルツブルクは惜しいかな車窓から眺めるだけです。

なだらかな隆起が波のように続く田園地帯に点在する集落、農道の辻には十字架や小さな祠、一段小高いところには小さなながら鐘楼を持つ礼拝堂、大きな集落には大きなお堂。塔の様式は鉛筆のようなとんがり屋根やらコンスタンチノープルを連想させる先の尖ったタマネギ型の屋根、ときには風化したロマネスクと各時代の様式を伝えて様々です。列車が市街地に入っただけで、町並みの上には必ず壮麗なゴシックの尖塔が輝き、街ごとにその高さと美しさを競うかみえまします。この地域には、ひとの住むところ十字架と聖堂のない風景を見出すことは困難であると感ぜられます。

葡萄と幾通りかの果樹園が続く丘陵地帯を蛇行して走り、開けた平らな土地に降りるとそこがウィーンです。旧市街の

中央に位置するサン・シュテファン大聖堂はやや緑がかった深い青を基調に色鮮やかなモザイクの幾何学模様が個性的な大きな切妻屋根、鐘楼からは旧市街が一望されます。

この日は折良く日曜日です。湧き上がる泉が雲海かと、鐘の音の不思議な響きに息を詰めて聞き入り、やがて鳴り止む頃このゴシックの大聖堂、主礼拝堂はミサの会衆に満たされています。先程堂前の石畳の広場で鬼ごっこしていた子供たちもいます。肥ったおじさんも白雪姫のようなお嬢さんも絵に描いたような紳士も。

深く静かに大理石モザイクの床に染み入り、見上げる天井いっぱい豊かにひろがってゆき、ステンドグラスの光の世界に更なる輝きを与えるオルガンの響き。この音色はモーツアルトの耳にも親しいものだったに違いありません。聖歌の合唱に小さく和してその静かな旋律と豊かな響きあい深く身を委ねながら、ふっと駆け足旅行の途上にいる自分を再発見して驚きました。お堂いっぱいミサの会衆を両腕に包み込んで法悦に満ちた「天なる父」は、異教徒までも共に包み込んでくださるのです。大聖堂とはそのような空間なのです。この土地では、ひとびとはそのような空間を日常に持っているのです。

ヒトが生まれながらに持つ感情は「驚き」と「恐れ」と「怒り」、取りあえずの自己保存に必須の反応様式だけです。育児の過程でここに気付き愕然とした記憶は多くの母親に共

通のものに違いありません。生きものの本能に根ざす心のはたらき、この対極にあるものを「人間性」と表現するならその中心をなすのは「愛」と「憧れ」でしょうか。生得のものではなく、母と子・親子・家族といった社会的生活体験を通じて形成されるもの、その意味では「愛」や「憧れ」は「文化」であり、「在るもの」ではなく主体的努力により創造するものです。

「自然」に支配され更に恐れと怒りの本能に支配されるヒトからその抑圧を取り除く「超自然のはたらき」を「神」と呼ぶとき、「神」はヒトの創造の所産であるが故に、必然的に「怒り」に近い本性を持ちます。「犠牲を要求する怒りの神」が「愛の神」にまで進化するためには「神」自身の自己変革、自己犠牲が必要でした。「愛に捧げる自己犠牲」、人間性の表現の最高のもの、それが「十字架のキリスト」です。人間性の進化はその「神」を進化させるのです。

しかし「十字架のキリスト」は中世ローマ教会の家父長的絶対支配の「踏み絵」と化してしまいます。「神」は「死を免れない生きもの」として恐れ怒る人間を救いとり、安らぎの生と死とを与えるために神御自身を犠牲に供された。ここに人間は「生きることの孤独」と「死の恐怖」から解放されたのである。よって死を恐れる者は「愛の神」を否定する者であり、「教会」を否定する反社会的存在であると「死の受容」は「神の愛」と一対の形で制度化されていったのです。何だか「天皇陛下万歳」に似ています。

死期が迫ってきたら神父さんをお呼びして懺悔します。隣

家の若い奥さんに恋心を抱いたことがあるとか、向こうの畑の出来の良いのを妬んだことがあるとか、教会の税金をごまかしたことがあるとかです。そして死んだら天国に行けるよう神様への取りなしをお願いするのです。そうしなければ地獄に堕ちるのです。

死ぬことが恐ろしいのは多分暗闇と同じで、その先に何があるのか分からないからだとかハムレットだったかも知っています。それが間違ひなく地獄だというなら、それを真に受けるのならそれこそ救われません。

五世紀以後北方ゲルマンの台頭と共に成長し、徹底した愚民政策でその地位を維持してきた教会権力は、十五世紀には東からのイスラム教勢力に脅かされます。ギリシャの古典を受け継ぎ自然を科学の目で見る新しい風が、東方とのつき合いを増した国際商業都市、ベネチアやフィレンツェに吹き始めます。人間は教皇さまの教義によってではなく、憧れと創造の営みによって、限りなく神に近づき得るのだと確信します。才能豊かな人々は人間性の到達目標として、限らない憧れを含めて、「神の愛」を描きました。ティツィアーノの「聖母被昇天」、レオナルドの「最後の晩餐」、ミケランジェロの「ピエタ」、ラファエロの聖母像の数々。

ベネツィアの古い聖堂、サンタマリア・デイ・フラオリ。ステンドグラスに囲まれてほのかに明るい主祭壇の中央に彼の「聖母被昇天」は掲げられています。広大な聖堂の壁面を飾る多くの聖画像の中にこれこそが訪ねるお方、はっと足を

止めさせるのはその色彩の暖かな輝きと特異な構想のためです。

今まさにこの地上を離れんと、翼のように両腕を大きく広げて天を仰ぐ雲の上のマリア。衣の下にのぞく裸足の右足はわずかに爪立ち、半ば開かれた両手のきゃしゃな指は大切な宝ものをそっと包み込む形。微かに開いた唇とやや紅潮した頬、見上げる優しい眼の輝きは高みへの意志。その視線の先には既に待つ天なる父の慈愛のまなざし。彼女の足許には父なる神のお使い、幼い天使たちが無邪気に遊び戯れ天上からの光にいっきと照らし出される。同じ光は被昇天の奇跡に驚き惑う地上のひとつとの驚きと恐れ表情を鮮烈に浮かび上がらせる。

この祭壇画の前に立ちつくすとき、「天上」のイメージは豊かにひろがります。「ファウスト」終章に語られる聖なるもの・永遠に女性的なるものへの憧れ。「星空の彼方に愛する父はまします」と交響曲第九のベートーベンの祈り、万人の祈り。―ここでは「死」は憧れの世界への歓喜に満ちた旅立ちであると感ぜられるのです。子供の頃日曜学校で習った讃美歌を思い出します。「卑しき心の無き幼児／玉座の宝に数えられ／御空の星と輝きつつ／・」。「そう、私の赤ちゃんも神さまからお預かりしていた／ありがたく大切に育てさせて頂いた／今はもうこの世の人になっちゃったけど／いつか、ここへ還るの／私も／彼女も／何時かここへ帰るの」

十六世紀のはじめ、ティツィアーノ四十一歳のこの作品は「神の愛」を描きながらあまりに人間的な感動に、愛と共感に

満ちています。作品は発表当時から熱狂的に迎えられ、これを妬んだ同業者からは「異端」の謗りを受けたのだと同時代人バザーリは「ルネッサンス画人伝」で伝えています。

この時代「神」は畏怖と崇拜と絶対的帰依の対象であり、愛の対象、ましてや共感の対象などであってはならなかったのです。「愛」とは優れて主體的な心のはたらきですから、信徒にこの主体性を許すことは「神」の即ち「教皇権」の絶対性を損なうことだったのです。

ここでは人々は皆美しい。町を歩けばジオットーのマリアさま、ラファエロのマドンナ、ミケランジェロのダビデ。この美しい人々のあればこそ、あの偉大な芸術作品は生み出されたのだと感嘆します。しかし、これらの作品の偉大さは如何に美しく描いたかと、その表現技術にあるのではなく、「既自己の内なる神」との「対話」を志向する点にあるのではないのでしょうか。「この世に神さまはいないわけにはいかない。ない訳にはゆかない真に帰依しお縋りする愛する神は、その方は、私自身が選びとったお方なのだ」と。

私と神とが相思相愛であるなら、そこでは「教会」は無意味です。「仏法僧」なくしては教団は立ち行かない。「私自身の神」を求める個人のこの立場は教団にとって紛れもない「異端」ですが、彼等の芸術に心酔し彼らを保護したのは「正統」の「神の代理人」たちでした。

歴史は進歩し、人間性は進化する。当然「神」も進化するのですが、「神の代理人」は古代的神政政治の理想を捨てることが出来なかった。「緋の衣着れば浮き世が惜しくなり」とい

うのに少し似ています。贅を尽くした生活と一族の利権拡大を事とする教皇が続きました。寄進と荘園からの莫大な収入を約束されている修道院長や司教の座は財産として売買されたのです。庶民を対象にした「免罪符」なるものに至っては当に「地獄の沙汰も金次第」です。英語には「教会のネズミのように貧しい」という表現がありますが、このネズミがカトリックなら、彼は台所へ行く道を知らなかったのでしょうか。「ヒューマニズム」の時代は、だから「宗教改革」の時代でした。ミケランジェロが教皇礼拝堂に画いた「最後の審判」で心秘かに裁いていたのは、実は教皇と教会だったのではないのでしょうか。

フイレンツェの洗礼堂。広大な堂内の天井から床まで、壁という壁は一面のモザイク壁画で聖書の世界を再現します。堂内に一步踏み込んだ者はまずその豪壮華麗に圧倒され、スローリーを追って次々と延々と展開される細密画のように精微な画面に更に圧倒されて言葉を失うでしょう。アダムとイブの「楽園追放」「ノアの箱舟」「狂乱のサロメ」「受胎告知」「十字架のキリスト」等々。知らない物語も数々、数々。土地のお方でもこの壁面の細部までを見尽くすのはほとんど不可能なことに違いありません。

そんな途方もない大画面を描き上げているその画材は、何と小指の先、親指の先ほどの色タイル、こんな色もあるのかと驚く大理石のかけらなのです。

五百年の昔、この壁面に貼り付くように向き合って、聖書の世界を描いていった人々を思います。高い支柱の上での仕

事は常に危険と隣り合わせだった筈です。首筋や腰や節々の痛みに耐え、冬には寒さに凍えながら、下図に従って一片ずつ、来る日も来る日も黙々とタイルを埋め込んで行つたのでしょうか。神に仕える使命感と美しいものを創り出す喜びだけが支えの辛い作業です。埋め込む大理石の一片毎に、マリアさまのような乙女に出逢った喜び、愛児を亡くした苦しみや、或いは親より大切な親方を恨みたくなったり出来る同僚を妬んだり、いじめられて全てを投げ出した気持ちだったり死の予感に怯え怒ったり、ここには彼ら自身の天国と地獄とが日々ちりばめられて行つたに違いありません。

制度として絶対的帰依を強制されたその「神の世界」は、これを描くとき図柄の細部にまで厳しい規定がありました。しかし、物としての壁画、この画面を機を織るように織り上げてゆくのは彼らモザイク職人です。手の動きに従って刻々に姿を現してくる聖書の世界は、神は、その無名の職人にも語りかけた筈です。心してそれに応え、「神」に形を与えるにふさわしいタイルの色合いと大きさを一片ずつ選り採っては、漆喰の壁面に埋め込んで行つたのです。埋め込みながら、選りあげながら、彼は「主よ、これは御心に叶うものですか?」と問いかけたに違いありません。

色タイルを選り分ける彼のその「眼」は彼の内から彼を照らしている「彼自身の神」なのです。「主よ」と語りかけ導かれて、彼の描く「神の世界」は織り上がって行つたのです。それにしても、気の遠くなるような細密な仕事と而も信じ難い画面の広がりです。「神と生と死とをみつめて身を削る日々の仕事」そして「その仕事の日々」――この風土の上にこそ、

あのヒューマニズムの巨匠たちは輩出したのです。「神の形」は心と力を尽くしてなざるとき、その心を透明なまでに磨き上げるのです。神とは人間性の最高の表現であるからです。

「神の家」のモザイクの壁面は、天使のようなフラ・アンジェリコや神の如きミケランジェロを磨き出す砥石であったかもしれません。絢爛として人を威圧するモザイクの「神の宇宙」とここを生きたひとびとの織り成す空間に立つて、言葉の無力に呆然と立ち尽くしたことでした。

日常を離れ、削ぎ落として「神の家」を訪ね「神の道」を巡る旅も、このようにして人の心を磨くのかも知れません。カトリックの世界でしばしば語られる「奇跡」はひとびとの関心を日常から「神の道」へと引き寄せる効果を持っていたと思われます。

ローマからセスナ機でマドリッドへ。パイロットは第二次大戦の戦闘機乗り、馴染みの乗客とおしゃべりしながらのあまりにもダイナミックな操縦です。着陸の瞬間には期せずして拍手が湧き起りましたが、もしかしたらこの拍手は安堵のためではなく、芸術的なまでにスリリングなフライトへの賛辞であったのかもしれませんが。なにしろ、あの「カルメン」の闘牛好きのひとびとのことですから。名詞だけがからうじて聞き取れるかなりキビシイスペイン語なまりの機内放送に心細く宇宙を遊泳した私共夫婦も、ふうつと息を吐き出し、それから手を叩いたことでした。

地中海は絵のように輝かず、渡りきって眼下に広がるのは

黄土色の荒涼たるメセタ高原でした。点在する白い石灰岩台地の間に基石のように置かれているのはオリーブの木、この画面の唯一の緑です。「アフリカはピレネーから始まる」という言葉が実感されます。

マドリッドは摂氏四十二度と信じ難い気温でしたが汗は出ません。ひたすら青い空に強烈な太陽、白い壁ばかりが目立って極端に緑の少ない街です。でも飲み物と食べ物がないのはありがたいことです。

この街でびっくりしたこと。睡眠剤代わりにと立ち寄った酒屋で「ヘレス・デラ・フロンテラ」のラベルが眼に止まりました。西洋史で憶えたこの地名が懐かしく、これをお願いしますとドル札を出しましたが、レジ氏はこのお札をやや暫くためつすがめつするのです。ここで通訳氏のひとこと、「心配しなさんな、刷り上がったばかりだ」。通訳氏の解説によればこの土地には偽ドルが氾濫している由。紙質の悪い「ドル」はすぐに擦り切れてくる、すると偽札との見分けが難しくなるのです。「だからドル札は嫌われ者なんだ」。

デパートの雑貨品売場にはドル札を型取ったメモ用紙がありました。上の説明で納得です。「やるもんだなア」スペイン人はヒスパニックなんて差別語を作り出したアメリカ人が嫌いなのです。

でもそこで想起しました。トレドへの一時間のドライブ。ドン・キホーテのラ・マンチャは雑草さえもしかとは生えない裸の赤い大地です。煙突の上にコウノトリがいる小さな街を通り過ぎましたが、ここにも緑はごく疎らで、生き物はひ

たすら雨期を待つと見えます。意外な出来事のように時折眼に入る緑したたる一郭は裕福な地主のお屋敷なのです。

こんな土地柄ですから、多分、庶民は金持ちが嫌いなのでしょう。王様を戴くこの国で、フランコ將軍の独裁の後に庶民が選択したのは社会主義政権でした。

でもどうしてでしょう、庶民はマリアさまと教会が大好きなのです。今この時代、この地の教会は「金持ち」ではなくなっているのかもしれませんが。グラナダではここで発掘された西ゴートの古拙な女神像をみました。スカンジナビアを発したゲルマンの一派、回教徒よりカトリックより先にこの地に移り住んだ西ゴート族の多産と豊穡の土着の神さまで。スペイン庶民のマリアさまは、本当はこのお方なのかもしれません。

ゴヤの版木が残っていて、刷り出して売ってくれるという美術館を訪ねましたが、生憎と休館日で版木にはお目にかかれませんでした。西ゴートも「レコンキスタ」とカトリック宇宙もナポレオンも、この地にある全てをひとつの身体に呑み込んでいるかに見えるこの巨人は、私には、今はまだ近づいてはいけない深い河です。「休館日」にホッとしました。

フランコ將軍死去を受けて「プラド」に返還されたばかりのピカソの歴史的大作「ゲルニカ」の大画面は、イメージしていたよりは遥かに平板な印象です。ルネッサンスとバロックの長旅に疲れたせいでしょうか。仮設の展示室で証明設計が出来ていないためかも知れません。「まだ戦後」の時代、修学旅行で訪ねた唐招提寺金堂の驚くほど端近に座しておいで

になった鑑真和尚を思い出しました。

マドリードから北へ、ここでも赤い裸の大地を見下ろして飛び、行く手に白い雲の山脈をみて西に転じます。雲に隠れるのはビレネー、この旅の帰途バリへ飛ぶときにもこの山はやはり雲の中でちらりとも姿を見せません。山脈の西の山裾、赤褐色の山肌を眺めながら高度を下げてやや開けた緑の土地に降り立つと、そこがサンチャゴ・デ・コンポステラ、大西洋は目の前です。

それにしてもこのイベリア半島というのは何と赤い土地ばかりなのでしょう。地球とは鉄の塊であると読んだことがあります。この土地は「イナバの白兎」のように赤裸の地球を感じさせます。

その昔、西ゴートのこの土地にアフリカから渡ってきたイスラム教徒はこの地にカレーズを張り巡らせ、小麦もオレングジも葡萄も豊かに実らせました。そのイスラムの緑の大地を砂漠同然の乾いた裸の土地に戻ってしまったのは、狂信的カトリックの「レコンキスタ」国土回復戦争でした。命と富の源であるカレーズを破壊し尽くし、イスラム教徒ばかりか、カレーズ再建技術の担い手であるユダヤ教徒までも迫害・抹殺してしまつたためであるといえます。南に追い詰められたイスラム勢力のぎりぎりの無血開城で壊滅を免れたグラナダを訪ねては、ここが実感されました。

遠くシエラネバタの山並みを借景に、緑と花々に包まれた丘の上のアランブラ宮殿と城下の街並みは、これもスペインかと疑うばかり自然の安らぎに満ちています。乾期にあつて

この豊かさはシエラネバタ山脈の雪解け水とイスラム・ユダヤの都市工学・利水技術のおかげなのだと云います。街を見下ろす高台に立つ教会堂にもイスラム時代の給水施設は現役です。この街グラナダの最後のスルタン一族が狂信的カトリック両王、あのコロンブスのパトリックだったカステージャのイザベラ女王とアラゴンのフェルディナント王に追われてジブラルタルを戻って往ったのは、わが応仁の乱から四半世紀の頃です。

その侵略者たちの「レコンキスタ」運動の精神的拠点として機能したのがこの聖地・サンチャゴ・デ・コンポステラでした。「レコンキスタ」は国土回復運動ないし戦争と訳され、イスラム世界に向けてイベリア半島でのカトリック勢力拡大を目指した歴史過程を示す用語で、教皇権絶頂の十一世紀、東方へ向けては聖地エルサレム攻略を目指す「十字軍」の運動が組織されたのと対をなすローマ教皇権の伸張策です。

留まっている水は濁りますから、登り詰めたら落ちるだけです。ですから、西欧のほぼ全域を掌握したローマ教皇権は東西へ勢力拡大運動を開始したのです。西に向けた侵略戦争が「レコンキスタ」でした。ナポレオン戦争やわが秀吉の朝鮮出兵に似ています。この地の民衆は後のナポレオン戦争でもひどい目に遭っています。

無謀な十字軍運動は世俗諸侯の利害が噛み合わず惨敗に終わりましたが、レコンキスタはイベリア半島全域を掌握する成功裏に終わりました。この成功に力となったのがあの悪名高い「異端審問」「魔女裁判」であつたといえます。異端審問は教会批判を、魔女裁判はケルトやゴートの土着信仰を封殺

しました。イスラム教徒やユダヤ教徒と疑われたらもう最後です。ですからこの土地では、マリヤ様大好き人間を装って祭礼の度に浮かれてみせることが、安全に生きる生き方だったのかもしれない。高校の東洋史の先生が語っていた、わが「天皇陛下万歳」の時代を想起します。赤い表紙の横文字の本、「貴様の本棚にあつたこれは何だ」と憲兵隊に呼ばれたのだと。

中央集権の歴史経験の浅いカトリック圏には今でも戸籍台帳というものはなく、これに代わるのが教会での幼児洗礼の記録なのだそうです。「ローマ教皇」は西欧全域を統括する「霞ヶ関」だったのです。

大西洋に臨み、大陸本土とイベリア半島とを境する雲に包まれたピレネー山脈の西の端に開けた緑の大地・ガリシア地方に、サンチャゴ・デ・コンポステラという街があります。主要産業は農漁業と観光。伝統ある医学部を持つ街で、私が訪ねた年はアノ・サント「聖年」と呼ばれる特別な祭礼のある年でしたが、静かな田園都市です。

空港からはタクシー、多分トウモロコシだったか畑の中の広くはない道路を走ります。日本人客を乗せることはそう度々ではないそうで、通訳氏同乗を幸いいろいろと話しかけてくれます。ザビエルが布教に行つた日本には一度行つてみたいけど、マドリッドに出ることさえあまりない。六人もの子供を抱えて食べて行くだけで精いっぱい。

一枚づつは広くはない畑地のそこそこには、石組みの土台

に乗った正倉院の校倉を思わせる細長い建造物が印象的です。切妻屋根の両端には十字架を立て、フランス映画「汚れなき悪戯」でみたおともらいの棺の形にも似ています。トウモロコシを保存しておく倉庫なのだそうです。十字架と特異な造形には特別な由来があるのでしょうか。運転手氏はご存知ない由で、只のお守りかもしれません。ドラキュラもイワンに意地悪する悪魔も十字架は嫌いでしたから。

途中、大学生と見えるＴシャツ、短パン、スニーカーにナツプザックとカラフルで軽やかな十名ほどの男女の団に出会いました。先頭を行くのは黒い僧服のお方で、このお方も帆立貝を下げておいでです。パリから歩いてきた学生の巡礼団で、この時期の風物詩であると運転手氏の説明です。長い夏休みは学生の特権ですが、一体どの位かかって来たのでしょうか。ピレネーのフランス側の麓からでも三週間以上かかるのだとガイドブックにはあります。

先達はお坊さんですから、多分道中は教会や修道院の宿坊に泊めてもらうのでしょう。それらの教会や修道院はキリスト教美術の歴史的宝庫でもあるのですから、誠に羨ましい旅行です。美術史や神学専攻の学生もいるに違いありません。パリの学生街・カルチュ・ラタンの一角を占め、フランス革命以前には莊園を持つ大修道院として存在した古い教会サンジェルマン・デ・プレでは、礼拝堂につづく広い構内で学生たちがサークル活動をしていましたから、カトリックの信仰は彼らの日常なのでしょう。

一方、バブル崩壊後のわが四国にもこのように軽やかな巡礼者が目立ってきたと最近のテレビで見ました。若者たちが生活を離れて汗をかいてみようと思いつてくれるのは、歴史が後戻りしないためにもありがたいことです。体力の限界まで歩き歩き続けて、歩きながら生きることの意味について考える。「立身出世しても不正蓄財で裁かれる者もある。他人を押しつけて地位を得ても、死ぬときは同じでしょ。人を押しつけた分だけ死ぬときは孤独ですよ」等々。受験戦争に疲れて荒れた心をひたすら自然の中を歩くことで自ら癒し、満天の星を見上げては人間も宇宙の一部であることを再発見して、ここに安らぎを見出す。満月と新月のように、生まれ代わり死に代わりしながらも自然は悠久にあると。

山の端の一角からほのかに射し染めた虹色の光がやがて黄金の「光背」に変わる一瞬、「ご来迎」を目の当たりにするとき、この現象がご来迎と呼ばれる訳が実感されます。お迎えにおいて下さる方は曰く、阿弥陀さまと或いは大日如来と。「お迎え」と感ずるのは闇にいるから。「闇」の中で心を澄まし森羅万象に心を通わせるとき、生きている自分を確信し、自然に生かされている自分を見出す。

こう考えてみると最近の環境保護運動は、宇宙に在るものとしての連帯の運動、カトリックもマルクスも超えた新しい形の信仰、再発見されたアニミズムであるかも知れません。もしかしたら、わが縄文の八百万の神々の世界は、愛も平等も自明のこととして内包する理想社会の原形でもあったのでしょうか。

第二世代のアニミズムは、政治に利用されて欲しくない、出来れば教祖も教団もないほうがよいのでしょう。最近、グリーンピースのダイレクトメールを受け取りました。

サンチャゴ大聖堂は遥かに離れて立たなければ鐘楼先端の十字架は見えない大建築、一基の大鐘楼を従えた本堂ファサードは、天高く冠のように聖ヤコブの巡礼姿の大彫像を戴いています。積み木を重ねたように幾層にも複雑に積み重なった建物の角という角、壁龕という壁龕には使徒たちと王様たち天使たち巡礼者たちが唐草模様の装飾に荘厳されて立っています。イザベラかと思える女王様も献堂の施主として青い空にシルエットを際立たせています。外観全体像の印象は赤茶色の砂岩を外壁素材としているせいもあって重く威圧的で、ミラノやパリのそれとは随分違っています。近年建ち上がったわが東京都庁舎に何やら似ています。

お堂入口に近づくと、この壁面も目の届く限りは聖書の世界の造形で埋め尽くされています。立ち並ぶ巨大な大理石の柱、ここにも使徒たちの丸彫りに近い彫像が出迎えます。一目でそれとわかる初期のロマネスク・ゴシックは重厚ながら、ややとぼけた趣があり温かです。新薬師寺のご本尊に似たお方もおいでです。柱間のアーチの下の中半形のスペースは最初期のものと思われる古拙な趣のロマネスク、隙間なく彫り出される奇怪な生き物たちはまさにガルゴリズムの空間です。季節毎の庶民の生活を描いた場面もあり、これは地域の教会堂では荘園の農奴たちに作業日程を教えるカレンダーとして機能したのだと読んだことがあります。入口の扉に、さ

らに奥に進んだ壁面にも、空のように見上げる祭壇にも、このお堂は内装外観とも七百年にわたって刻み続けられた夥しい彫刻と彫像に包まれ囲まれて「自然は空白を恐れる」という言葉を思い出させます。

余白の芸術を愛し、語りすぎないことを美德とする文化に育ったものには息苦しいこの空間は、自然とは対極にある、自然をも威圧する権力の意志です。権力は空白を恐れるのかとそう思ってみるとき、わが東照宮と陽明門はそれであるかもしれません。

極彩色に金色眩しい主祭壇の見上げる天井に、馬にまたがり、剣をかざしてイスラム教徒のモーロ人を踏みしだく聖ヤコブの巨大な彩色彫像は、狂信的カトリックの世俗権力がその意志を最もむきだしにした時代、十六世紀のバロックです。「異教たらずとも汝異端の徒、かくの如くなるぞ」とグロテスクに、悪魔的にさえ見えます。

しかし一方このお堂の長い歴史の初層、今は地下部分になっているロマネスクの石積や古い小さな礼拝堂、司教館の一角のギルドホールの壁面、そして境内と周辺地域に少なからず残る水飲み場や道標、権力者の関心を逃れた領域には懐かしく温かな手触りが残っています。マリアさまや聖人たちが職人たち、動物たちと装飾模様、そして帆立貝。風化して、摺り減って、平になってしまったものもあるレリーフ、それ等の荒い稚拙とも見えるノミの痕は、素朴なしかし篤い信仰を伝えて見る者の胸をとくに熱くさせます。

その昔、ここに生きて石を刻み続けたこれらの石工たちは、

貧しくとも分かち合い支えあつて、「愛の神」に導かれる心豊かに温かい共同体を営んだのに違いない。愛が平等を導かない筈はないのだから。こんなにも優しい作品を残した人たちのだから。

そして七百年余にわたつて、今も、この大聖堂を支え続ける巡礼者の心、一人ひとりのその胸の内を思います。聖堂正面入口の最初の柱は跪いて接吻する唇の高さ、手の高さで、大理石ながら摩滅し大きく凹んでいるのです。

「死を見据える文化」について考える旅をしました。死を見据えることでその生きかたは違つてくる筈と感ずるからです。北と南、同じカトリック圏でも「死」のあり方とその見据え方は、その地域の歴史と風土で随分と違つているように見えます。古典ローマの遺産を継承し、太陽の恵みに溢れるイタリアと、イスラムの先進文化を全否定してしまい砂漠同然の土地を耕し始めたスペインとは、当然違つて来るのでしょう。大地の恵みは充分にあるけどイタリアの空ほどは明るくない、しかも域内を二分する熾烈な宗教戦争を経験した南ドイツも他とは異なります。フランス革命の歴史を持つひとびとについてはサン・ドニとシャルトル巡礼を計画しましたが果たせずに終わりました。

この旅で最も印象に残っているのはハイデルベルクです。ネッカー川のほとりに、お城の小高い丘を見上げて、十字架を戴く聖堂を中心に煉瓦色の屋根が連なる絵のような中世都

市。旧城壁の向こうには近代的なビルの立ち並ぶのが遠望されます。

西欧最古の大学のひとつハイデルベルク大学の学び舎に隣接する聖堂は古いゴシック建築ですが、お堂の内部には聖書の宇宙を再現する壁画も壮麗な祭壇も、ひとを恍惚とさせ法悦の境地に誘うステンドグラスもありません。鐘楼へ上がる通路から眺めた天井の一角には、剥がされてかすかに残つた天使の翼の一部を見ました。きつと、この街が聖書の教えるところを自ら選びとり、カトリックの信仰を捨ててローマ教皇に反旗をひるがえしたとき、その決意を示すために、歴史あるこのお堂の壁画やステンドグラスも捨て去つたのでしょうか。宗教戦争の時代に、この街と大学は改革運動の先頭に立つてその拠点となつたのだと後に読みました。

剥ぎ消された壁画の痕を思い浮かべるとき、信長の叡山焼き討ちの意味もはつきりと理解されます。ひとの心を魅了する歴史的遺産であつても、それが麻薬なら焼き捨てるよりなかつたのです。夏休みのこの時期、この教会堂での学生による連続コンサート「バッハの夕べ」は、ウィーンのサンシユテファン大聖堂聖歌隊の讃美歌にもおとらず心に染みて響きました。

このハイデルベルク大学では学生・留学生の国籍を問わず学費は一切無料で、ドイツ語の不十分な学生には基礎講座も設けられている由です。宗教団体の経営でなくてもそんなことが可能なですね。国籍を問わない教育・医療の無償化は州政府の施策としてある由でしたが、東独崩壊後の財政困難

の今も存続しているのかは不詳です。

学内見学ツアーの日本人通訳氏は法学博士過程に在籍の院生です。「街のひとつも学生にはとても親切だし、田舎から東京の大学に行くよりは経済的にも余程ラクですよ。だからこの街には世界中から意欲的な若者が集まって来るし、みんなすぐにこの土地に溶け込んで親しくなるんです」と。この街の人口は十四万に過ぎないと聞き、伝統というものの力をしみじみと羨ましく感じたことでした。

十六世紀の宗教戦争を、自ら選び取った「神」のために身を挺して戦い抜き、五百年余に及ぶローマ教皇の絶対支配からの独立を勝ち取ったこの街と大学のひとつの歴史が、競争よりは共感を、支配することよりは平等を真に大切にさせるのでしょうか。

このような風土では「死者」も「生者」から差別されることはありますまい。安らかな死は遠くはないと感ぜられます。

老医の昔ばなし

就 鳥 生

占い医者

雪解け水が春を運んで来る。落^{ふきのとう}の臺^{だう}が顔を出したと思ったら今日は横の水溜まりで芹^{せり}が芽をふいた。三つ葉ももうすぐ食べられるだろう。窓から見える山々には残雪がまだかなり多いが、麓の方は紫色から少しづつ緑がかって見える。北国の春の訪れはせっかちである。独活^{うど}が生え、やがて落^{ふき}や竹の子の時節もやって来るだろう。山歩きが楽しみである。

受付の光ちゃんがカルテを持って来て住所欄を指さしている。私もしばし目をこらした。汽車で三時間程かゝる、湾の向こうの町である。十八歳の娘が患者で、母親が付いて来ていた。

「知人の家にでも来ているのですか」

「い、え、先生のご診察を戴き度くて今朝一番の列車で家から参りました」母親が丁寧に挨拶をした。

「二年前から胸を患って土地の病院にかゝって居るのですが、はかばかしくないので参りました。病院では入院を奨めるのですが娘が承知しないものですから」

診察した所かなりの副呼吸音が聴こえる。空洞もあるようで恐らく開放性だろう。あとで考えたが、何でもこんな遠くまでわざわざ来たのだろう。あそこの町の病院はたしか結核専門

な筈だ。私の名前があんな遠くまで知られているとは大した名医になったものと密かにほくそ笑んでいた。

翌朝X―寫眞を見せながら、そちらの病院で言われた通り長期入院の必要がある。帰って同じ先生にかゝりなさいと説得していた。母親が云った。

「ストレプトマイシンというお注射が出たそうですね。いかゝなものでしょうか」

その頃はまだ結核予防法による国費認定の制度がなかったのだが、何処の病院でも米軍横流しをヤミで使っていた。私も少しは持っていたが、何しろ貴重品である。

「誰かにすすめられたのですか」

「実は私共の町によく当る神様が居て、占ってもらいましたら、ここから丑寅^{うしとら}の方角の病院でストレプトマイシンの注射をしてもらえば立ち所に癒ると出ました。真っ直ぐ海を越えてこちらの病院が丑寅に当りますので注射をして戴こうと上がった訳です」

私の誇りと思ひ上がりは無惨にたゞきのめされて、ひどく落胆した。

素人産婆

春は海霧^{ガス}の季節である。牛乳を薄めたようなとばりが山も海もそして人間をも容赦なく包み込んで、窒息しそうな冷気の中に居る。いやな時節だ。人々は地上の僅かな隙間にもぐり込んで蟹のように脱皮の日を待つのである。

今日は土曜日で午後休診。さつきから寝ころんで新聞を眺めていた。

「先生いたかい」浜の定市が裏口からのぞいた。

「困った事になった。嬢のやつ昼前から産気づきやがって、産婆呼びに行ったら朝から隣町へ買物に出掛けちゃって留守さ。町の姉に電話かけて捜してもらってるんだがまだ見付からない」

「明日は学校の運動会で隣近所のおつか達が皆んな出掛けていて、与八の所のばゞに来てもらっているんだが、まなこが薄いし毫^{もう}ろくたかつて、頼りにならない。うちの嬢ときたら難産ぐせがあるので心配だ。ほんにあの年でかかえるなんて全く恥^{はづか}かしい話よ」なあにみんなお前の責任だ。

「先生お産は素人だらうけど居ないよりましだと、ばゞあが言うんで一寸来てくれんか」

冗談でない、第一お産なんて学生の時産泊以来見た事もない。

「駄目だ、それより産婆を早く捜せ」

定市はあきらめて帰って行った。

三十分程して定市の六年生の娘が走って来た。

「もう駄目だよ。おつか出そうだって言ってるよ。先生早く来てくれや」

産婆はまだ見つからんらしい。やれ／＼えらい事になったと出掛ける支度をしていたら、今度は三年生の弟が駆け込んできた。

「出た、く、く」

と叫んでいる。医者も魂^{たまげ}消て走った。

家に入る時かすかに赤ん坊の泣き声を聞いた。すでに分娩

は終わっていたのである。気が楽になった。なんとか臍の緒を切り、後産引っ張り出して無事終了、と言っても全くおっかなびっくりである。

「ばあお湯使うぐらい出来るだろう」

「オラ目が薄くて駄目だ。先生やれ」

おやゝ沐浴までやらされるとは何たる悪運や。いいかげんに洗ってタオルにくるんでいる所へ、ようやく産婆が駆けつけて来た。産婆は私を見ながら、

「お産軽くてよかった。難産だったら先生ではどうにもならなかっただろうに。なんだこの沐浴のやり方、さっぱり垢落ちておらんぞ。お、よしよしかわいそゝ、やり直すからお湯汲んで」全く侮辱の態度である。

どう伝わったか、あの先生お産だって大した腕だ、難産苦もなく取り上げたって言うぞ。おかげで私の名声はとみに上がった。

導尿

ようやく天候が回復した。一週間の延期で今日は学校の運動会である。町場と違って生徒数が少ないし運動会は年間のメインイベントで部落ぐるみである。学校医でPTA会々長の私は朝早くから出勤してテントの中で賞品渡しをしていた。出店も出ているし万国旗がはためいて会場は喊声に盛り上がっていた。昨日までの雨で濡れていた地面から湯気が立ってコンディションは最高である。可笑し^{おか}かったのは父兄の競走

で、竹村のおっちゃんが張り切り過ぎて天を向いて走るの方向が判らなくなり、役員席に向かって来た。テントの支柱に抱きついて一呼吸、また真剣な顔つきで走って行った。

パーンとピストルが鳴って今度は一年生の競走が始まった。小さな体が軋^{こた}がるように走っている。もんべをはいたばあさんが父兄席から飛び出して一緒に走り出した。浜川のばあさんで「孝夫ががんばれ、ゝ」と叫んで孫の応援である。その甲斐もなく孝夫はビリ、婆さんが一着でゴールインした。

この部落の古い歴史はアイヌの人達の開拓史である。狩りや漁業で暮らして来たのであろうが、仲々勤勉である。今でも部落の主導権を握っているのは彼等である。浜川の息子なんかは大企業のかんりの地位に付いていると聞いている。明治以降に入ってきた和人の流れ者より数等優れている人物が多い。言葉使いも標準語で丁寧である。浜川のばあさんはこの所神経痛で通院しているが、いつもニコゝして物腰も柔らかだ。熱心な仏教信者で教養もあり文学書を愛読しているようだ。尊敬すべき人物だと思っているが忘れられない想い出があった。

或る日はばあさんが尿閉を起こして往診依頼があり、急いで行つて見ると冷や汗をかいてうなっていた。下腹部はばんばんだ。大急ぎでカテーテルを出して導尿を始めたが、老人なので外陰部は皺^{しわ}々に萎縮して、仲々尿道口が見つからない。ばあさんの小言が怖くて懸命に探していると遂に雷が落ちた。「先生！アイヌの尻、シャモと違うか！」全身から汗が吹き出した。

『追憶』

曾根 清孝

(曾根医院)

火の山は見えつかくれつ 吹雪道

停^{とど}めてしばし 絵筆はこびぬ

吹雪くなか 二人の行く手はばむごと

道 凍^いてつきて 車進まず

〔白い道〕

山のホテルの 昼下が

緑の浴槽 ガラスの間

赤いランタン 白い肌

外は冷たい 冬の風

思い出一つ 増えました

〔木枯の岡〕

キャンドルの灯が消えて

人々が去って行く 裏町

カラオケの声も絶えてしまった

あんなにも 皆から好かれた秀子よ

思い出が あまりにも強かったから

私はもう うたえない

〔キャンドル〕

乳白色の海霧^{ガス}が 冷たく

今日も流れている

夜明けの早い 湊町

午前四時

私の心も まだ冷えている

〔冷夏〕

夜に咲く花 水中花

キャンドルの灯を消さないで

暗い冬が こわいから

胸にともした灯を消さないで

来年の夏が さびしいから

〔夏祭り〕

火の山の火種いつしか 燃え盛り

生命^{いのち}の野火と拡がりゆきぬ

火の酒に 今宵吾また酔いしれて

ひたに歩きぬ 夜の街をば

〔火の山〕

小雨に煙る林道を

通り抜けたとき

秋の色をただよわせて

ひっそりと

光っていた 湖

〔林道〕

人生は 戻れない旅
歩くだけ 歩くだけよ
幸せになつてね
雨にぬれてる
燈ともひとつ

〔追憶〕

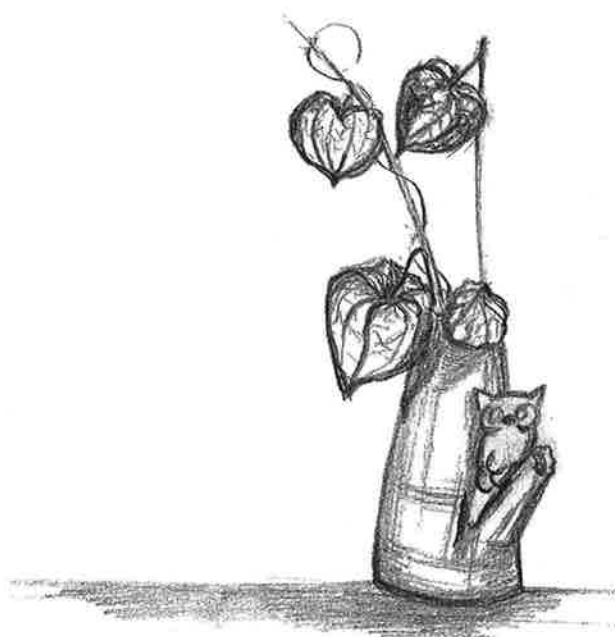
この一言を待っていた
「アデュー」
いつか聞くだろうと思っていた この言葉
恋の終りのご挨拶

これで ふんぎりがついた
心の重荷が消え去った
これで白紙にもどれる
さあ 心機一転

〔自由の詩〕

*

カラオケで明け カラオケで暮れゆきし
あはれあはれ 去年こぞよ今年よ



座 談 会

残しておきたい言葉・風習

曾根清孝・山本俊一
東 浩・斎藤成樹

編集委員（加藤・上田・村井・澤山・大久保・三村・斉藤）
事務局（高橋・小杉）

平成9年7月17日
於：ビーフハウス志摩



大久保　お晩でございます。今年の「波久島」十八号の座談会のご案内しましたように『残しておきたい言葉・風習』というテーマで、お話いただきたいと思っています。ご覧のように、これはという論客に揃っていたきましたので、今日は大いに語って頂きたいと思います。では加藤先生から口火を。

一同乾杯

加藤　じゃ、飲みながら、食べながら始めましょう。実はこれ編集委員の三村先生のテーマメモから、選んだわけでした『残しておきたい言葉・風習について』は前に二回程やった『世相を斬る』三番目になるんじゃないかと思うんですね。実は七月七日の七夕に、夕方、自宅の方のブザーが鳴って、女房が外が見える窓があるので見たら、誰も居ない。と思つてソファに座ったら又ブザーが鳴る。それでまた行つて、玄関の鍵を開けましたら、小学校三年位の男の子二人。黙つて。で用事を聞いても何も、言わない。ハツと気付いて「七夕で来たの?」、そうしたら頷づいたそうです。ちゃんと玄関に立って居るんですよ。それで、かき餅を持ってきて、上げたんですけれど、さつ

ぱり納得しない顔だったんです。それで帰ったんだそうですけれどね。私の子供の頃はもうものすごい「ロウソク出せ、出せよ、出さない」とゴロツクぞ」でね、爺さん婆さんの家に行つてダハンこいたものです。あういう風俗も既に死んで居るに等しいと思ひましたね。

曾根　そのこと新聞に出ておつた。七夕で呉れと言いに来て、有難うと言わない、今の子供、黙つて行っちゃう。

加藤　私達の日常の問題、身の回りの挨拶、そういう話から始まつて、好きな言葉嫌いな言葉。あまり片意地張らないで、浴衣掛けのつもりで話して頂ければ親交会風の座談会になるのではないかと思います。私が司会ということですから、私も、編集委員も揃つており、司会になりゲストになり。そこで、私が一番感じるのは三十年後半過ぎてから、診察室で「何処悪いの?」「ここ?」「ん、ん」と「痛い」か「痒い」とか何とか話が初対面でいけるのが大体小学校の四・五年生まで、中学校入ると駄目、高校になると話にならない。逆に言うとな然通じなくなる。大体日本語ですから、詩があるし、挨拶言葉というのが多彩にあります。

た。ついこないだまでは。暑い、いやあゝ寒いと、涼しいなもあつたし、そろそろ夏ですれも無くなつたし、そろそろ秋ですれも無くなつた。

現代つ子

東　言葉ですと、まず患者を診察して喋っているのは私だけなんです。はつきり言う。来た患者は何も喋らない、特に高校生です。足を怪我しようが、風邪をひこうが、一言一言全部私が聞いてあげないと何にも言わない。小学校の低学年の方がまだ聞いた事にちゃんと返事してくれる。たいいてい母親と入ってきますよ、母親には出て貰っている。

加藤　向い合つて話するのが下手なんです。

東　下手ですね、カーテンの影にいる母親が口を出すんですよ。

曾根　普段から話さないから。タマゴツチとか、ファミコンとか、結局一人で遊んで。僕らの小さい頃というのは爺さん、婆さん、子供も一緒になつて、会話出来るわけ、だから今の子供は可哀想なんだ会話が出来ないから。

東 私は細かい事を見る癖があつて嫌われているんですけど。いま観光客が来る時期だけ、臨時にフェリーに乗る室工大とか登別の工学院の生徒を一月月間だけ雇うのです。それは一回一回健康診断やらなきゃならないのです。ところがです、幾ら待っても診察室に戻つて来ない、詰まっているのはトイレなんだね、尿の検査しますから。看護婦に「なぜ早く通さん」と聞いたたら、まずこの数年間は二十才代の男は全部並んでオシッコ取らないんですよ。全部大の方に入つて尿とつて、そして持つて来る。そういうあたりが悪い習慣だと思ふね。

曾根 海水着着て温泉に入る。男たるものが海水着きて入るなんて馬鹿じゃない。

澤山 相撲がそうなんです。まわし付けるでしょ、あれがいやだから相撲部に入らない。だから大学の相撲部はだんだん無くなつて来る。

加藤 やつぱり羞恥心みたいなものからですか。

東 そうだろうね、やはり。

加藤 先生、どうですか、痛いとかいう用語が多いでしょ、やりとりに。

斎藤（成） 最初に困つたのは、病むと痛いの違いが判つていない。病むというのは自発痛の事です、その他の運動痛・圧痛というのは痛いという事。ただ、三歳かそこらへんの子が股関節の疾患で来て、股開いたら「エッチ」と言われる。「エッチ」という言葉を知っているという事です。凄く「エッチ」なんです。そこで親の顔をジロツと見て、親が悪いんだよ。（笑）

加藤 考えてみますと、言葉が乱れていると一頃言われたけれど、乱れているのではなくて考えられない、頭の中に語彙がない。漫画的に仲間が集まつて、キヤーとかピーとか、キョーとかホーとか言つてれば、それは良いんですけれど。一寸対外、フォーマルという感じになると全然頭の中は真っ白になるんじゃないか。用意している言葉も無いし、だから会話も出来ない。日本語の貧困化。カタカナと漢字、こんな便利な表記法はないのに。カタカナ多くなり過ぎましたね。何処にも通じない英語が。

大久保 初めそういう言葉を聞いた時に、非常に気になった言葉がいつのまにかそれに同化されるというか、あります

よね。例えば、目線という言葉があるでしょう。視線から視点から全て目線というんですよ。もともと目線という言葉があつたのかどうか知れませんが、目の高さとか物のか物の捉え方までを目線で見るというのは間違いないかと思う。

上田 今日故意地悪爺さんが集まつて、言いたいことを言うとのことなんです。結局、今一番頭に来ることは、親が自分の子供に対しての教育・しつけに責任を持たなくなつた。全て学校がやらなから悪い、誰かがやらなから悪い、基本的な社会人としてのことは親が子供に伝えて行くものである。中学生の人殺しもいたが、周りのことが全く聞かえていない、そういうことがばつかり。親は少子で子供が一人しかなくて、大切に大切に皇太子のように、基本的な所をやらないし、ましてや他人が目に見かねて注意したら、逆にやられますでしょ。何言うんだというやり方。そういう所はもう少し親がしっかりして教育してほしい。

教育勅語

曾根 上田先生に反論する。そういう親を育てた先生が悪い。今の七十代以上はいいけど、今の五十代の親というのは終戦後にアメリカの思想でもって、今の親を育てたものだから親が馬鹿になって、親が子供をちゃんと出来ない。親が悪いのではなくて、そのもう一つ前が悪い。

上田 親を育てた、教師が悪い？（笑）
曾根 それを今日言おうと思ったわけ。終戦後アメリカが自由を押し付けて、学校教育だつてアメリカが決めたのだから。日本は強いものには平身低頭するけれど、弱いものには手を出す。ドイツは違う、そういう学校教育が終戦後アメリカの馬鹿な自由を持ってきたものだから。その頃育った親が今の親で、その子はおもつと馬鹿になっている。

上田 どうしたらいいの。
曾根 それを言おうと、これを持ってきた。（教育勅語の写しを出席者に配布）戦争は悪いけど、教育勅語をもう一度学校に持っていけというの。今の先生は駄目だ、元が悪いから。今の世の中で通じ

る、「夫婦相和し」「朋友相信じ」も何も変なことは書いていない。ただ、忠義と戦争だけをオミットすれば、教育勅語というのは今でもいいと思う。

今の先生を怒らないで、その先生を教えた先生を怒ればいい。もう死んでいないかも知れないけど。（笑）今の先生に言っても遅い、だから今の世の中を変えようと思ったら五十年かかる。（笑）

図書館の山下さんを知っているから、電話して教育勅語の資料を貰って持ってきました。

大久保 先生なら、まだ暗記しているとかばかり思っていました。（笑）

加藤 山本先生どうですか、私は新聞屋やマスコミは原稿文化を作るリーダーシップをとっていると思いますが、これはどうもいけませんねと言いたいのですかどうか。

山本 まず、自分達が一番賢いと思っている。次に、世間一般を自分達から見るかに俗物と捉えて、まず思い上がった姿勢から間違っている。

加藤 教えてやろうみたいなね。

山本 頼みもしないのに、ああ悪い、こう悪い、まだ努力が足りないとか、欲

の深い親が子供に要求するみたいに。

加藤 一週間程前だったか、民報のテレビに統計が出ていた。親子の対話、どの位行なわれているか、一時間以上というのが半分有るのです。子供に聞いたらいい。嘘でないかと思う位。そしてさらに対話をしなさいというアドバイスが聞こえて来る。私達、親父と対話した記憶無い。

山本 世の中が変わっている事は変わっているのだけれども、具体的にどのようになっているのかはみんな、同じ子供の目に子供の目線で見ればわかると思う。昔まず、親と子供の間にたくさん兄弟、子供がいました。親と話しなくても、友達だとか兄弟だとか話す相手がたくさんいる。親の比重がずっと少ない。住んでいる環境で違うかも知れませんが、子供の内は大人だとか年上の人が意外と大きくみえた。私ら、学年が三年か四年違うとずっと頼もしいお兄さんという感じ。今で言うホームレスも居たし賢いも居た。昔、子供というのは、ホームレスというのはつまらない大人で劣っているとは思わず、何かの敬意を持っていた。あいう人達を殴ったり傷つけたり、火つ

けたりは、昔の子供にはなかった。つまらない大人という感覚を子供に飢えつけたのは、テレビじゃない？。馬鹿な大人、愚かな大人、爆弾投げたり。親は親で子供達に今お前たち努力しなければ、あういう馬鹿なやつになるぞと言う。子供おかしくならない方が不思議だと思えます。

乱れ言葉は新日本語

加藤 なんとなく考えてきて、今もって嫌いな言葉、私はニーズとか好きでない。それから張り付くという言葉もわりと使う。あれは警察関係の用語で、刑事を張り付けるとか、土木関係で河川敷に地権を買い取りたい時に、まだ五戸位張り付いているというようなものが有ったのが、今随分張り付くと使われています。それとひらがなと漢字制限で大部新聞もゆがめられたんでしょうが、オウムの坂本弁護士、らはひらがなで致、あういうものは専門用語ですから漢字で書いても大した事はない。それを全部、らをひらがなで書いていた。

澤山 言葉の出来かたで、スポーツ新

聞の見出しは凄く影響しています。音と意味を一緒にして、使っている言葉が多いです。例えば、英語の言葉を使っているのに日本語のカタカナを当てはめている。日本人にはわかるけど、外人には全然わからない。音感と意味というものをごっちゃ混ぜにして使うから段々崩れてきてしまう、私は一番見出しが影響していると思います。

加藤 介護福祉、老人に対するものにカタカナが、いわゆる英語綴りのものが多いと、あれも無神経ですね。厚生省も。大久保 アメニティーだの、ノーマライゼーションだの、我々聞いてもカタカナ聞いて辞書引かなければならない。曾根 ツーショットで日本語でどういう意味さ。

上田 男と女のあれで、ペアでしたものツーショット。

加藤 ワンショットで英語に有るのよ。

上田 連中が使っているのは違う。わけありの女と写ったとか、わけありだとか、あいつと危ないという奴と撮られたというのをツーショット。

曾根 悪い意味だ。

加藤 ニーズという言葉も嫌いなもの。

東 官庁用語で使っている。

大久保 一番カタカナ使ってくるのは官庁です。

東 残したい言葉よりも消したい言葉の方が多い。(笑)

大久保 日本語って難しいなと思ったのは、ある山村の民家のいろりで串魚を焼いている。炭火に灰をかけると温度が下がって火加減が丁度よく、好い加減に焼けると言っていた。我々は「好い加減」に焼けるというのは良い具合に焼けると言うけど、一寸アクセントが違っていると「好い加減」は悪い言葉になります。やはり日本語って本当に難しいと思って。同じ字を書かれた時に一寸したアクセントで良い意味と悪い意味が有り、外国人に説明する時にどうやったらいのだろうと思いました。「好い加減」、私達は丁度いい具合に焼ける火加減と理解出来るが、十代・二十代の人が聞いた時に「好い加減」と「いい加減」とを聞き分ける事が出来るかと思いました。

斎藤(成) 私はまだ手術もやっているし、勤務医だし、僕の所に大体八十五名位の若い医師が来んですけど、言葉

でなくて言葉の意味がすっかり変つてきた。それを解らないと大変な事が起きるのです。私も大変な事を起こしています。色んな説明をして「解ったか?」と言つた時に何と答える今の人、「聞いていました」と言うのです。解る、解らない関係ない、聞いていました。聞いているという事は解らないという事です。昔からある、聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥、丁度今反対です。解りますか、聞くのは一生の恥なのです相手に対して。知らぬは一寸の間ウーッと済むのです。(笑)

上田 うまい事言うね。

斎藤(成) その意味を解らないうちは大変困りました。我々が言っている事は彼等にとつて物凄いことを言っていると思う。知らない事を聞けと言つと、そうすると知らないという事が恥なのです。もう一つ、自信がある、自信がないというのは、一例でも診たら自信があるので、自信がないというのは一例も診た事が無いという事です。先程の教育の關係で、知らないという事は恥で友達に隠す。それがズーッと重なつてきてそういう事なのです。自信がないという事は、一例か二例やつただけと自信がないと思つてい

た。診た事無い事が自信がない。自信があるのは一例でも診たら自信がある。大変ですよ、言葉の意味が違つてきている。僕は八十数名と接してきましたが、我々が言葉が變つてきたのではなくて意味自体が變つてきているから、こちらの真意が向こうに伝わっていない。手術場に入つても、今は上の順番に入つて消毒したら一番下が来るのです。信じられないです。我々の時は放り出されていた。

山本 聞くは末代の恥で、聞かぬは一時の、知らぬは一生。(笑)

大久保 ところで本題に帰りますけど、先生夫々で残しておきたい言葉とか習わしと言うか風習と言うかしきたり、こういうもの何か。

曾根 長幼序あり。

上田 目上の者とか、年上の者に対してはそれなりの敬意を払うという事。

加藤 事柄で言えば、温故知新だね。あと言葉で言えば季語さ、季語はやはり。曾根 俳句のか、あの俳句も新季語というのが出来てきた。

加藤 それでなくても季節言葉。日本みたいに四季を迎える国はない訳だから、季節で月だけでも三百位ある、月の

ついたもので。季語でなくても良いのです。それとさの付く良い言葉がある、小百合とか早乙女とか。あれは日本語としては響きの良い言葉だね。

大久保 だけど、こういう感覚が鈍つたのは食い物のせいじゃないかと思う。季節がないでしょ、南半球から取れたものを食っている。そうすると脳まで鈍感になるのは当たり前だと思う。今の冷暖房完備の中で生活して、カーキラー入れたり、或いはヒーター入れて車で走っていたら鈍感になるのは当たり前だと思う。

加藤 季節感の喪失というやつ。

大久保 だから、暦というのは赤い札と大安と仏滅と友引、後の何とかかんとか要りませんでしょ、要りますか。要らないですよ。

曾根 農家の方は旧暦が必要だ。畑仕事の人ね。

大久保 いやでも、みんなビニールハウスですよ、この頃は。

加藤 でもね、津軽には何にも言わなくて良い、典型的なものがあるでしょ、津軽の。ラジオでやっている、伊奈かつぺい。私も津軽衆ですから、よく解ると

いうか耳慣れている所もあるのですが。町で、お父さん二人で、「どさ」、「ゆさ」、「どこいくのさ?」、(ウン風呂屋だ)、あつそうか。それからあの、「ケエ、タラ」、(食えつたら)。津軽独特で、伊奈かつぺいの聞いていると、みんなお母さん達聞いていると笑うでしょ。時々聞くと面白いの、これが言葉のスタートであるし、信号のね、最高の方にいくんじゃないかと思う。

大久保 自分なりに残しておきたい言葉、好きな言葉だけど、「おおきに」という言葉なんです。北海道は「どうもどうも」でしょ、丁寧で「どうもでした」でしょ。これはありがとねとか、ありがとより遥かに便利で良い言葉だから、これを標準語にしたいな。トーンとかイントネーションによって一寸感じが違うでしょう。

澤山 一寸聞きたいのですけど、今患者様という言葉があるでしょ、私が最初に見たのが京都で患者様専用駐車場と書いていた。それから最近聞いたのでは、宛て名書きのところに様が付いている。患者様として紹介状を書いている。紹介状貰った時にも何々様の件につきとして

様が付いている。何かピンと来ないのですが、殿で良いじゃないかなという気がするのですが。

加藤 いやらしいですね。

上田 それは媚びているのではないかなという事でしょう。

澤山 そうですね。患者様という風になるのかなと。

大久保 その病院、お客様と書いていませんか。(笑)

加藤 様というのはどが早い、銀行が早いだろうか。

東 官庁用語で殿が様になったのはいつからだろうね。

上田 様になったけど、ただ付けたという慇懃無礼さは全然変っていない。

三村 正しい日本語からいったらさんでないですか。様で日本語おかしいんじゃない。

大久保 それから私聞いていて、こりやうまい言葉が残って欲しいというのは、お婆ちゃん、スソ、シモと言います。スソの方とかシモの方、これが非常に奇麗で嫌みのないすんなり言える日本語だと思う。これが変な言葉でやると何ちゅったつけ、この頃若いの。

曾根 明治時代の言葉だけ良い言葉だ。

加藤 三村先生、大久保先生が言われたような残しておきたい言葉ありますか。精神的な。或いは好んで使っている言葉。おつむという言葉を使いますか。

三村 そういう言葉は使わないと思いますけど、私達のところで特別な言葉はないけれど。とにかく、挨拶ですね。患者さんには僕は必ずおはようという言葉を使う。有り難うございました。みんな言わないです今。人間関係の中で、私は必ず患者にはおはよう、有難うという言葉を教えるんですが。基本的に、その言葉を言わなくても良いような世の中になつていきますから、これが問題ではないかなと思う。残す言葉という事も大事ですけど、会話がなくても生きていける世の中になつていきますから。だから、会話が必要でなくなった世の中でもあるかも知れない。おはようとか今日はとか出来るかどうか、精神発達した子供達には必ずそれを教える。必ず、それをやるように。

加藤 うちの女房なんかでも、ここ何年かではつきりと、あつ今日暑い、あつ

今日寒い、二つしか言わないんです。一年中、私わざと、そうだな底冷えするな、肌ひやっとするな、と言うとキザと。

三村 それが挨拶ではないですかね。

加藤 挨拶であるし、季節というものが日本の場合非常に変遷に富んでいるでしょ。

斎藤（成） 目で挨拶するでしょう。手術が終った高校三年生の部屋に、心配で見に行ったら、一言も言わないでただVサインした。最大の向こうの敬意だったのです。こっちは一言位言ってくれ。

（笑）

上田 斎藤（成）先生、隣の女の子とツーショットだった。

斎藤（成） そんなもんです。その表現の気持ち解ってやらないと、彼等はそれが最大の表現なのです。

三村 僕はここで強調したいのは、人間関係が希薄な中でテレビなんか見て豊富な情報を得る、自分で考えない受け身の人間になっている。こちらから働きかける事が失われる世の中になってきているから、少なくとも人間関係を守るための「おはよう」とか「今日は」とか「有り難う」とか言える事を、学校教育でそ

ういう事をまず人間の基本だという事で、憲法の中で書いて欲しい。

山本 憲法でなくて教師の指導要領の中に。

斎藤（成） だけど、反論する訳じゃないけど、そういう所を話すると最終的に家庭のしつけだという。学校の先生にばかり責任転嫁出来ない。確かに両方ともに責任あるのだけど。こっち悪いと言えれば楽だ。学校悪いと言えば解決する。そうじゃない。

三村 家庭の中で、夫婦間の中で、恋人同士でも。全て。有り難う。おはよう。

斎藤（成） そういう事らしいのだけど。

三村 特別な言葉でなくて良いと思う。山本 なぜ、挨拶する。かつ、挨拶するんだらうね、必要なんだらうね。

三村 やはり、私達の領域では肩で物言う、目でものを言う、後ろ姿でものを言う事が出来る。だけど言葉を発する事によって人間と人間の波長がまず、目でものを言うという事は勿論ありますよ。肩でものを言うとか、それ以前に言葉が大事だと思う。

斎藤（成） 村井先生、昔婦人科は腰におを付けたんですね。ビックリしたん

です。腰をお腰を上げてください。

加藤 婦人科の先生というのは丁寧ですよ。

斎藤（成） 女性に対して凄く丁寧で、ビックリした。独特の言葉が一杯あるんですよ、婦人科というのは。

村井 アレ丁寧語ではないです。接頭語みたいに、お股と言わないで小股と言います。

斎藤（成） 後輩の事も気になるけど、骨の説明するのに、おほねが悪いから、と言うのです。

大久保 それはオコツじゃないの。

斎藤（成） おを付ければ良いと思ってる。あだ名がオホネという。（笑）

東 北大の学長が今年の入学式で、まづ正しい日本語を使うように挨拶したというけど、新入生に。解るね、その気持ちね。

加藤 言い古されてきた言葉で、魅力的な言葉を使う場所をしつこく言うんだ。正しいとかいう問題ではない。

大久保 加藤先生の得意なところで、正しいって何か、加藤先生の言わんとしているのは、良い言葉なのです。正しいというのが正しくなくて、良い言葉を使

いたい訳でしょ、加藤先生。

加藤 良いというか、響きが良くて、耳に気持ちが良いもの。

大久保 東京弁でも、非常にきつい言葉があるでしょ、だから良い言葉を使うように心がければ良いですよ。先程の、どさ、ゆさ、これは非常に簡潔だけれども良い言葉でしょ。

加藤 どうも日本中に普及しましたね。これも最近非常に便利な言葉だとつくづく思います。どうもでした。(笑)

親の親が悪い

加藤 三十分位、例の十四歳についてドクター、精神科も居られるので、オフレコで。

大久保 あういうのに対して、評論家になりたくない。

曽根 アレは特殊児童だ。

大久保 特殊なのか、当たり前なのか。時代というか、世相というか、はつきり言って親達PL法で訴えられる。全ての親が。

山本 私を生んだ罪か。

東 あっ、そうかPLね。

大久保 製造物何とか責任法、これで学校の先生含めて親たち全部訴えられても仕方ない。

加藤 あういう事から、俺達自身が家族を守るためにどうしたらいいとか、あういうのはいらないだとか。先程あつたが、平和日本、平和日本という時、よそが責めてきた時、手挙げて手合わせてにっこり笑って死ねるか。死になさい、そう言わなければ、有事立法も何もなくて、攻めて来られたらそのまんまと、そのうちに向こう飽きてくるか、それじゃ矢張りおかしいと思うし、私は矢張り向こうが俺を殺そうと思ってきたら俺が殺すだろうと思います。

澤山 その前の段階で、僕はペルーの問題があると思う。人質が取られたでしょ。あの時に、平和的に解決しよう、平和的にと行って、日本は阻害されちゃって向こうで勝手にやられたでしょ。日本の憲法を取り入れて平和的に解決しようと思っても、具体的なものがないのですから、あのままいったら、多分不幸な結果になったと思う。

斎藤(成) 向こうの風土とか解らないから、日本では絶対そういう事をしない

だろうと思うし、性善説だからね。

澤山 戦後、そういう事に慣らされて来ている。五十年経った。だから色んな問題が起こってくる。

加藤 規制というのが、ただフツと思ったのは、この子がもし大人だったら、恐らく死刑だろうし、しかしそうはならないだろうし、更生を願って、そういう子が更生という事が当てはまるだろうか。その子が死ぬまで、寿命が来るまで、普通に考えてもかえって残酷にならないか、むしろスツと眠らした方が良くいではないか。ずっと思っていたんです。だからこれをどうせアードコードという訳じゃないですけど、ただそれだけの話なんですけどね。

斎藤(成) 加藤先生の意見に賛成だとか、反対だとかではなくて、よく人の命は地球よりも重いとみんな賛成、賛成と言うでしょ。殺された人の命は残念だになつてしまふ。

上田 加害者の方ばかりで、特に弁護士さんなんかでも余りにも加害者の人権、人権。殺された人、その回りの人達はどうなるのだというのは確かにあるね。

加藤 一つの命を大切にしないといふ前に、命って何だろうというのを、必要なんでないか。

斉藤（甲） 今の話聞いていて、分裂・妄想をもって人を殺した精神異常者が捕まっても裁判では起訴猶予になります。一―二年入院したら出てきて、又人を殺してしまうケースがあります。又一―二年入院したら、又出てきます。

斎藤（成） 先生が叩いたら罪になるのかな。

斉藤（甲） 今度の子供そうですね、聞く所によると二―三年で出てくる。十四歳の子供は、三つ子の魂と言っけれども、恐らく更生不可能ではないかと。言っちゃ、駄目なんでしょうね。怖いです。

大久保 斉藤甲先生のお子さんは年齢的に近いでしょ。父親としてのどの程度までお子さんとのコミュニケーションとか、新聞報道について。

斉藤（甲） 親として自信無くなっちゃいますよね。あいつ何考えているのかなと。

大久保 日常で大きな事件ではなくて、ギャップって出ていますか。

斉藤（甲） ウーン、それはプライベート

トな事です。やはり年寄り、僕ホントはここに出てくるの嫌だったのですが、ペルーの話出ましたけど、年寄りが今の若い者はだらしないとか言います。だけどペルーの事件見ていると、フジモリ大統領は日本人です、昔の日本人はああだったのではないかと思う。もつと毅然として、対立出来る。ところが今の政治家の年齢と言えば、この席の年齢層なんです。なんてだらしないんだろうと。今の世の中が悪いとすれば、大人が悪い。大人と言えば年寄りです。僕はそう思います。

斎藤（成） その前の総理大臣は良かった。

斉藤（甲） 福田赳夫はダツカ事件ですか、日本赤軍を釈放しています。あの人は戦前を経験している筈です。その辺からよじれてしまつて。

斎藤（成） 自衛隊法、警察法等があり駄目だと言われて、そこに問題がある。

斉藤（甲） 色々言い訳があまりしようが。

斎藤（成） 言い訳でなくて、さつきスミスは良いと言われたが彼等は十八になつたら軍隊に入らなければならない。

日本でやったら、PTAのお母さん連中反対するでしょう。

斉藤（甲） それはそうした親の時代が。

斎藤（成） それはスミスが良いというのと違う事なの。

斉藤（甲） アメリカあたりを見ていると、ベトナムでおかしくなりましたが、アメリカ人というのは国に対する自信とというのがあります。

澤山 戦争が終つてから、ガラツと変えられて、福田さんと佐藤さんは再教育された。洗脳されたという形で。

斉藤（甲） その人達が育てたのが、今の十四歳です。上が腐れば下が腐る話じゃないけど、下が腐っていると簡単に指摘出来るけど、そのからみがある。

曾根 十四歳の親も悪いけど、その親も悪い。

山本 母親と父親でどっちが悪い。

曾根 やはり母親だろうね。四六時中一緒に居るのは母親だもの。親父は会社で一生懸命仕事をやっている。今のおっかさんは外で勤務しているが、昔のおっかさんは家庭を守ってくれていた。家庭を守るという事は子供を守るに等しい。今の母親は子供は守らないけど、仕事は

やって経済的に家が儲かる。例えば親父が三十万稼いで、おっかさんが三十万稼ぐわけ、三十万稼いでも子供はマイナス三十万になる。やはり、母親は家において子供を、孟母三遷じゃないけど子供を教育すべきなのです。

澤山 やはり、一番最初に山本先生が言われた大家族制が無くなったというのが、一番だと思う。死についても、お爺ちゃん・お婆ちゃんが死んでいるのを見ているし、そういう事が順々にきているから、死に対する考え方というのも結構持っている。今というのは、テレビ・アニメ・ゲーム・タマゴッチは最たるもので、死んでも生き返ってくるような、そういう感じで見ているから殺しても別に罪悪感がない。そういう感じが段々芽生えていると思う。十四歳の件で中学生にアンケート出したら、自分もそういう気持ちになる事があるという回答がだいぶ居るという話でした。そういう風に時代が流れている、すぐ情報が伝わるという情報社会のアレではないか、テレビで中東戦争が翌日には出ている。

三村 この子に関しては一般的な論理とこの子が異常か正常か、一般論で語る

場合と、この子に関して良くわかんないけど、異常心理の病的な心理の要素が強いような気がします。一般論と異常心理の話を別にしないといけない。

澤山 ただ、異常心理になった場合には無罪になる可能性が出てくるのでしょ。多重人格というか。

三村 必ずしもそうではないけど。親子関係等が分らないけど、一般論の親子関係の問題、異常な病的心理状態にあったかどうか区別しなければならぬ。ここで幾ら話しても。異常な心理状態になると、一般的に考えられない事をします。やはり、情報によると異常心理だと思えますけど。だけど、そこで言いたいのは親子関係がどうだったのか、お母さんがどうだったのか、父親の役割はどうだったのかという事はもっと追求しなければいけない。

山本 分かなければ、簡単に批評出れない。親との関係で昔は父親の権力が強くて、もつとも息子にだけけど、父親の希望で押し付けた時に挫折したら、母親が良いんだ、良いんだって救ってくれば何でも無い。今父親は家にいないで、母親が子供に希望を託して尻を叩く

のは競馬の馬の尻を叩くと同じで馬は走るのだけど、より良く早く走るように叩くのなら良いけど、一等にならなければ私の子でないと言われたら、子供例えば十人の中で親の希望かなえるのは一人、九人はかなえられない。今百人に一人、二百人に一人、一流大学に行かないとなんだと言われたら、母親に対して物凄く罪悪感しかない。

残すべき言葉は不倫？

加藤 言葉で言えば、そんな事常識だろうや、常識と言う言葉がなくなったか使われなくなったか。

山本 それはありますね。

加藤 そんなの常識だろうやと。人を殺しては駄目とか、子供の首を括るとか、カエルの足を引っ張ってもぐとか、そんな事したら駄目だと言ったら、どうして駄目なのと言ったら、常識だろうやと、そういう事なんです。常識というものを作りあげる元の流れが無くなっちゃった。

曾根 矢張り学校教育が良かった。我々の時代は。(笑)

加藤 常識も死語になりました。

斎藤(成) 常識だって人が作って来たものでしょ。

加藤 自分のおとつあんなり、隣の親父の、向いのおじさんもおばさんも、同じルールで出来た時代でしょ。今はそういうものが無いから、テンデンバラバラで何も無いと言ったら何もない。

澤山 常識を破る事が常識になつてきたというか、常識を破る事が一般に普及してきて、常識というのは多数の人が考えてきた事が常識になるんですよ。

斎藤(成) 昔は正しい人がそれを作ってきた。今は沢山の人がだ。

澤山 常識を破る事を戦後進めてきたわけです。そういうムードが出来てしまつて。

加藤 我々大衆というのははんかくさいから、片っぱで髪を染めれば全部染めるし、ショートパンツと言えば全部ショートにしちゃうし、最近はみんなと同じ事をやっている。右向けば右向き、それは普通の大衆でしょ。常識は破れ、破れと言わなくても破るやつは破りますよ。今のものは破っていない。たきつけかな。

山本 結局常識でも、何でも楽しい事で無い。何かしなければなんないとか、ねばなら無いとか、どちらかといういやな事に属する。ただうまく合うと、安心感がありますけど。それに対して自由というのは何か人と離れて好きな道があると思っていないと人間それほど独創性は無いんです。外れたようで、赤信号で渡ったやつその後について行く、みんな渡れないか、自由というものは持っている。

加藤 それと今ドラマで出てくるけど、男、女、あんだ男でできたでしょ、そういう時のあんだ男でできたという時の男は余り良い感じで言わないでしょ。そう言う時にはあの人好きな人できた、そういうの使わないでみんな男と女の関係からもつてきて、ドラマでも言わせているんだけれども、みんなそういう言い方が相応しく無い可愛いオネエちゃんに、男。

澤山 ダイレクトに言うのが、今の言い方です。包んで言わないで。

加藤 殺人とか、殺すという言葉がもう耳に慣れました。

斎藤(成) デイレクターが二十代、三十代で我々みたいなのは対象に入っていない。

ない。

大久保 今クイズだの、ゲーム等に出てる有名な女性タレントが昔ツツパリだったとか、高校で万引きをやったと平気で言う。万引きやった奴をなぜそんな所で何々ちゃんとかちゃはやすの?、恥ずべき事でしょう。例えしていても人の前で、万引き程度はやったなんて、それを容認している、回りの連中が。ゲームなんです。万引きは犯罪なのに。例えやっていても隠すか、人の前で言う筈が無いのが常識です。

加藤 喋っている芸能タレントを責める前に、企画を作る奴にお前は何をやっているのだ、少し常識で考えろと。

澤山 NHKの教育テレビを殆ど見ていない、NHKも余り見ない。他の方はそういうのをやっていけばみんな見ますよ。視聴率が上がります。近ごろ、NHKまで民放と同じような事をアナウンサーが言うようになってる。

大久保 不倫の方がまだいいでしょ。隠れてやっているから。

斎藤(成) 渡辺淳一が怒っていた。失楽園というのは不倫じゃない。不倫が駄目だからアレを書いた。今の不倫という

のは命も賭けないし。お金はかけていますよ。彼等は目的が違うのです。不倫即失樂園、彼は怒っちゃって。

加藤 失樂園読んだ？

斎藤（成） 署名入りで、ダブルハートから全部持っています。同期で同門だから。昔の売れない時の1冊書いて3千円の紙がざら紙ですから。黄色い紙ですから。この前、ヤッヤ昔あんな変な紙で来てさ参ったよと言ったら、お前あれは残しておけよあれが一番高いんだから。

上田 それは値打ち出るわ。（笑）

斎藤（成） 彼が言っているのは、不倫というのは不倫だから、昔のとは違うというものは書いたという。不倫は不倫かも知れないけど、その精神が違う。テレビでもやっていて、どっかの奥さんが本人が出れば良い、男優が駄目だ。女性はいメージを持っているのでは、失樂園に出る男優はこういう人が良いという。あれはミスキャストだ、モソモソ言っているし、はつきりしないし、優柔不断だし。大久保 見ているけど、古谷一行ではなく、津川雅彦。

曽根 あれは適役だわ。

加藤 不倫も結構ではないが、契約不

履行で金を取ったらしい。アメリカは女性に甘いから、逆の場合は罪が安い。

曽根 離婚したら、アメリカでは男は1億位取られる。油断できない。

加藤 不倫というのは白河法皇とか、孫と。

大久保 だけど、あれは不倫と言わないでしょ。当たり前でしょ、情事。

曽根 情事なら良い、響きが良い。

加藤 あれは偉いから、表に出ただけで、下のものだったら。

大久保 秘め事なんて良い言葉もあった。

加藤 不倫で響きが良いんじゃない？

大久保 「ミチオ」という名前の人が「ミチ」の字を聞かれて、不倫の「倫」と言ったら直ぐに納得。（笑）（倫理の倫では通じない）

東 残すべき言葉は不倫。

三村 映像が子供の心を傷みつける。どう関わりあろうが心の荒廃に繋がるわけです。今一番心配しているのは、一生懸命見ている子育ての母親達が即受け入れている。援助交際でも、母親が働いているからなったんだけど、母親が子供に影響を与える。映像の影響は子供より、

子育てをしている母親が吸収していると心配している。

村井 今日のテーマは何でしたけど、ヘンな日本語、家庭のしつけ論など期せずして世相を斬るパートⅢになりました。うちの看護婦がキムタクとか何とか流行の造語を知っているかというので、こっちも廓言葉で対応、おまえ水揚げってしってるか、半玉とはなんてね。フタマタコーヤクって何だとか。だけどこれってジェネレーションギャップではなくて単なる言葉アソビか。廓言葉もなくなるでしょう。言葉の国とはいえ、流行語というのは、時世によってあって良いと思う。しかし、今日は大変為になりました。教育勅語の見直しとか（爆笑）、これは今後大いに取り上げるべきテーマではないでしょうか。（拍手）

（おわり）

あんちくいす

二人の愛刀家

福 永 純

(福永医院)

平成九年九月十四日は、私にとって大変ショッキングな日となりました。私の父と三十年以上に亘り親交を深めて頂いた徳田敬太郎先生が急逝され、自分の勝手な解釈ではありますが、私から見れば父の後を追うように亡くなられたかに思われてなりません。御見舞いに伺った際も、病状を覚悟されてか「親父と漫談してくるよ」と苦しいにも拘らず笑顔をつくって話され、私は言葉もなく胸が詰

まってしまいました。日頃から私の事も何かと心配して頂き、御助言を受けたことも考えますと、益々、寂寥感が募ってくるところです。父とは白々と空が明るくなるまで幾度も話し込んだことがあったそうです。父と一緒に先生と何度もお会いし、父が亡くなってからも何度もお話しをして頂いたことが思い出されます。

徳田先生は小児科医として、また、私の父は内科医として、各々地域医療に貢献してきたと思います。始まりは、開業当時私の父が先生の所にレントゲンの機械を見せてもらいに行ったことから聞かれています。以後、数十年に亘る活躍は、それだけでも充分賞賛されるべきことでありましょう。

医療に携わる一方で、二人は愛刀家としても、長年二人三脚で協力して来ましたが、昭和四十二年、室蘭刀苑会を結成し、徳田先生が会長として、私の父が副会長として活動が始まりました。全国組織の刀苑会は、刀剣界第一の本阿弥流鑑定家の村上孝介先生を主幹とし、毎月の会合に加えて年一回は村上先生が来蘭され、鑑定講座と名刀鑑賞会を開き、その都度、

村上先生はゴルフバック二つに約二十本程の名刀を運んで来られたそうです。その中には多くの国宝や重要文化財が含まれており、徳田先生はよく当時のことを「おかげで昔はたくさんのお名刀を見ることが出来て勉強になったが、最近では納まる場所に納まっていよいよ刀が出て来なくなつたね」と述懐されていました。源頼光の佩刀で酒吞童子なる山賊を退治したと言う由来があり、天下五剣の一つとして足利將軍家に伝来した名物童子切



室蘭刀苑会



記念大会場

安綱（国宝）や島津家が足利將軍家より拝領し同家第一号刀の重宝とされていた備中青江康次の太刀（国宝）、吉川家第一の重宝である狐ヶ崎為次（国宝）、これは吉香小次郎友兼が鎌倉幕府より討伐の命を受け駿河国狐ヶ崎で梶原一族を討つた際に佩用したものなど、その他いろいろ室蘭に持って来て頂き、手にとつて鑑賞できたことを良く話されていました。

室蘭刀苑会の最も大きな業績は、昭和



室蘭支部

四十九年の第十回刀苑全国大会を室蘭の地で開催したことでしょう。登別温泉・第一滝本館に全国から三百人程の愛刀家が集まり、刀剣が百五十振りと鐔や刀装具など八十点が出品され、鑑賞会と鑑定会が開かれました。

来国行、来国俊、栗田口久国、新藤五国光、行光、広光、備前国長船長光、景光、青江康次など古刀の名品を揃え、その他新刀、新々刀に加えて、室蘭の特徴を生かして日鋼の堀井家の刀も紹介され

たそうです。

その後、瑞泉鍛刀所、測量山などの室蘭観光と、昭和南山、洞爺湖温泉、中山峠から札幌へと二泊三日の大会を僅か十一名の会員で無事に終了させ、刀剣界各紙や室蘭民報にも全国大会の名に恥じぬ素晴らしい大会と絶賛されました。

歴史性に乏しい北海道において、このような多数の名品を集めた大会は、地方の団体としては珍しく、全国の愛刀家に知られるきっかけとなったようです。

さらにその他の業績として、刀苑本部における昭和名物牒の編纂にも室蘭支部から協力していることです。古名刀を昭和期に再調査したもので、享保年間に八代將軍吉宗が各大名の名刀を記載した享保名物牒にあやかっただけものと察せられます。古来の名物には、有名な所持者にまつわる話のついたものや、非常に良く切れるもの、出来の優れているものに因んだ名前のついたものなどがありますが、波游兼光のようにこの刀で斬られた者が川を泳ぎ切った二つになったと言ったものや、骨喰藤四郎のように戯れに切る真似をしただけで相手の骨が砕けると言った到底信じ難いような切れ味の凄さを形

容した面白いものも数多くあります。昭和名物はどのようなものだったのか、今はもう聞くことも叶わなくなりました。

私の父は豪壮な刀が好きだったのに対し、徳田先生は優しい短刀を好まれ、僅か三十センチ程の中に長い刀の多くの掟が詰まっている魅力を良く話されていました。刀剣鑑定の拠り所となる作風を大別して五カ伝と言うものがあり、それらは、大和伝、山城伝、備前伝、美濃伝、相州伝で各々いろいろな掟があります。徳田先生は、中でも相州伝がお好きのようでした。相州伝は、山城国栗田口国綱、備前三郎国宗、福岡一文字助真の三名人が鎌倉幕府の命により下向し、鍛刀したのが始まりと言われていますが、その三人の誰かの子供とも弟子とも伝えられている新藤五国光が真の意味の祖とされています。以後、行光、正宗、貞宗、秋広、広光など短刀の名手を数多く輩出しました。その特徴は沸出来の作風で、地には地沸を敷き地景を巧みに織りなし、刃中には金筋、稲妻などの景色を巧みに添えているところです。

名刀の多くは、鉄の産地か、または良質の玉鋼が良く手に入った政治の中心地



刀苑十周年室蘭全国大会 於 昭和新山前

に生まれ、現代刀には到底真似の出来ない地鉄の冴えと刃文の働きを見せ、千年に及ぶ輝きを放っています。今思えば、この輝きをいろいろと語り合い、仕事以外の安息の場としていたように思えます。

今年に入って東京の著名刀剣研究家にお会いする機会がありました。が、「北海道は蝦夷と言われていた地ですから名刀などあるはずがありません。中央で漏れた刀が出回り、西日本などの雑刀を刀屋がまとめて持って行くと高く売れるそうですよ。」と言われた時は、ある種の偏見ともとれましたが、現実には、当たらずとも遠からずと言うところなのでしょう。最近、池田家伝来の鎌倉一文字助真の刀をやっと見ることが出来ましたが、徳田先生や私の父が昭和四十年代に多くの一級品を手にとつて触れることが出来た喜びを話していたことと比べますと、時代の変遷と言うものを感じました。

私は徳田先生の長い間の父との親交に深く感謝しつつ、現代においても再現出来ないであろうこれらの業績や、この二人の愛刀家が幸せだったと話していた昔を思い起こし、また、この二人が残っていた足跡をきつと忘れることはない

でしょう。

東栄先生と山岡上野

千葉 壽良
(三愛病院)

東栄先生は皆さんご承知のとおり、輪西で開業され、嘗て輪西の村長さんと云われた位非常に温厚な人柄で地域の人達にも尊敬されておりました。後に産婦人科をなされており、先生が室蘭を去られる際に私が直接聞いた話ですが、先生が室蘭で開業する時に当時室蘭は景気が最盛期でここで開業すれば、絶対間違いないと思つたそうです。開業後は患者さんが朝から沢山来て、休む暇もない位忙しかったと云っておられました。

先生は室蘭市医師会にも色々と貢献されておりましたが奥さんが亡くなった後、平成四年に東京の調布市に移られました。私の所へも向かうの様子等詳しくお便りがありました。先生は札幌一中卒の大先

輩で室蘭にも何人か卒業生がおられますが、その中でも先生は上の方でした。私も先輩となる東先生には、同窓のよしみで常日頃よりご指導、ご交際戴きました。

私の二女早苗は母親の希望で自宅で出産する事になり、先生にお願いしました。陣痛が始まった時、先生はお留守で先生の所の助産婦さんの助言で先生を室蘭迄お迎えに行きました。先生は可成りお飲みになつていましたが、さすが私の話を聞くと「よし！」とシャキツとなり、無事出産に立会つてくれました。その娘も三十を越しております。

私が恵愛病院の院長をしている時に東先生から上野広一郎という人を是非、恵愛病院で預かつてほしいと云う事がありました。どういう訳かと云いますと色々ご事情がありこの人は又、先生とは一中の同級生でもありました。この方の履歴書が残っておりますので後記で掲載致しますが、この上野と云う人は京都の同志社大学を卒業後、大正十四年にイギリスのオックスフォード大学に入ったと云う非常に立派な経歴の持ち主であります。

この方の会社「山岡上野」は私の聞いたところでは、当時は栗林商会や檜崎産

業と同等或いはそれ以上と云う事を聞いています。しかし、本人は多分創立者ではなかったのでしょう、商売と云う事に關して会社の仕組み若しくは役員等が不十分でありました。又本人のお金の使い方も普通と違い、我々も滅多に着た事のないカシミヤの下着など一回着ただけで、洗濯などせずに捨ててしまい又新しい物を購入したり、奥さんも英国人だった為、色々とお金が必要としたのでしょう。何か二人乗りの馬車で中央町を堂々と走ったと云う様な事もあったようですがはつきりしません。

この方の持っていた土地も室蘭の中央町、母恋、御崎を中心にその他にも可成りの部分持っていたのですが、番頭が戦争前に適当な値で売ってしまい、財産の殆どを失ってしまい、最終的に一人になって室蘭に帰って来て、生活していたそうです。

その後、右側の脳出血を発症し、昭和三十二年十月二十四日私が東先生から預かる際に「偉い方だから充分注意する様に」とアドバイスもあり、私も覚悟して恵愛病院の院長として、全面的に治療と看護と介助を引き受ける事になりました。

本人は顔色も良く頭の方はしつかりしており、英語で日記を書き、時々英語で喋り、私が分からない英語ではないですけれど、私の回診の度に英語で挨拶を交わしておりました。非常に明朗活発な性格の方でありました。

しかし、何れ最後の時が来て、昭和三十六年十二月八日亡くなられた訳でございしますが、私も本人死亡後、脳の状態を知る為に副院長の加藤和雄先生（現三恵病院長）と二人で開頭してみたところ右側に巨大な出血巣があり、それは鶏卵大位の出血で本人は右利きだったから大分違っていたと思いますが、それでも入院中はあまり苦情も云わずに医師、看護婦の云う事を聞いて、療養に専念していたと云う思い出があります。

嘗て、札幌医大の中川教授とこの話について少々触れた事もありましたが「山岡上野」と云う会社はもう殆ど忘れられています。前にも述べたとおり栗林商会や植崎産業などに匹敵する程の企業であったと私も確証はないのですが、東先生から聞いておりました。

又、中川教授から必ず君はこの事をまじめなさいと云われておりました。私も

今迄色々な事をやっている関係で、少々遅れましたが今回機会がありましたので、是非まとめ上げたいと思った次第であります。

只、亡くなられた翌日に北大の学生だったと思いますが息子さんが挨拶に来て、遺品等を私から直接お渡し致しました。その息子さんはその後、医学部の精神科の教室に入られて現在は医療短大の教授をしてありますが、これも何かの縁だと感じております。

以下、本人の経歴書が私の手元に残っておりますので全文掲載致しまして、この項を終わります。

尚、山岡上野の事について何か知っておられる先生方がおられましたら是非私の所へ連絡戴ければ幸いです。以上

経 歴 書

本籍地 北海道室蘭市大町八番地
現住所 東京都世田谷区成城町五七四
番地ビショップ英郎方

上野 広一郎

明治三十四年十一月十八日生

学歴

大正十年札幌第一中学卒業、京都同志社大学入学

大正十三年全大学よりロンドン大学留学許可、発音学専攻

大正十四年オックスフォード・ユニヴァース・カレッジにて英国経済学専攻す。昭和三年三月帰国す。

職歴

昭和三年京都同志社大学、神戸ス克蘭トン外人学校英語講師及大坂日印貿易部長。

昭和五年北海道室蘭市に於てニューヨーク・スタンダード石油株式会社代理店経営、造田造林業土地建物売買業山岡上野合資会社継承す。（大正四年設立）及全市教育会顧問。

戦時中全市日本製鋼株式会社室蘭工場社宅八十戸建設及全工場用工業木炭製産請負完納す。全市日本製鉄株式会社輪西工場焼結工事建設請負完納す。

終戦直前全市日本軍司令部通訳顧問。終戦後全市渉外一切担当す。

全市駐留軍第十一空艦隊所属俱樂部管理嘱託す。

昭和二十五年上京、世田谷区成城

町に於て成城英語会塾開講す。全二十六年芝浦電機株式会社府中車輜工場スクラップ壹百廾貳下げを受く。

今年学習院工事場、京王、帝都電鉄株式会社及び東京急行電鉄株式会社よりスクラップ四十廾貳下げを受く。

賞罰

昭和十七年北海道室蘭市に於て全市及び教育会に寄与せるにより紺綬褒章を受く。

右の通り相違ありません。

昭和三十二年七月

右

上野 広一郎

To be,
or not to be.

上田 智夫
(上田医院)

行くべきか

北欧には今迄縁がなかったが興味はあった。福祉の先進国、アンデルセンの

故郷、ハムレットの舞台、登別の水族館「ニクス」のモデルとなった城……。

コペンハーゲン大学のアジア研究所と連絡がつき、行ってみようかと腰をあげた。

室蘭ロータリークラブからはバナアを
あずかり、「ニクス」からは邦文、英文
の案内書、室蘭観光協会からは英文の
ラー案内地図を受け取り、札幌で英文の
「京都」「美しい日本」「茶の湯」「唐詩選」
などを購入、お茶道具一式をあずかつて、
背中を押される様に出発した。本類が多
くて重かったなあ。

道中

航空券はオランダ発行の乗り継ぎ、日
航成田ホテルのパウチャーが入っていた
ので、ホテルで座席の指定、荷物のコペ
ンハーゲンまでの乗り継ぎ送りが出来て
便利だった。

荷物の置きやすい最後部席で、英国
ニューカッスルへ帰るニッサン自動車の
現地駐在員と意気投合、寅さんワイン、
コニヤックなどを飲んで上機嫌、日本に
帰ってからの検査が気になるなあ。

乗り継ぎのアムステルダムでは、搭乗
券の指定した乗り場には誰もおらず、中

央案内所で聞くと乗り場変更とかで、逆方向のはるかかなた。帰りのスカンジナビア航空からの日航への乗り継ぎでも、カウンターにはJALのスタッフはおらず、係員くらい出しておいてくれよ。無事荷物も身体も着いたから、ま、い、か。ホテル

コペンハーゲンのホテル「アドミラル」は立地条件が良く、裏はすぐ港でオスロ行きの豪華フェリーが発着、「アマリエンボー宮殿」は窓から衛兵交代が見えるし、「ゲフォンの泉」(北欧神話のデンマ



ホテルとカノン砲

ーク創造神)や、五稜郭そっくりのカステレッツ砦跡、有名なアンデルセンの「人魚姫」などは、散歩で十分以内の場所にある。建物は二百年前の石造りの倉庫の改装で、部屋の中にも太い木材の梁や根太が露出しており、正面玄関には古い大砲と砲弾、ロビーには帆船模型や海将(アドミラル)の像などがあつてなかなかである。

すぐ近くに「医学史博物館」があり、入館無料。午前十一時に英語の館内ガイドがあるが、入館者は寅を入れて三名、こちらを向いて話をするので、わからなくても「フム、フム」と相槌を打たねばならず、閉口。



医学史博物館

古いレントゲン器械、調剤棚、民間薬草の展示など。百年前に使われていたという、足踏み式の歯科器械があつたが、日本では終戦後も使われていたので苦笑する。

福祉と物価

北欧は福祉先進国、今や我が国も少子高齢化を迎えて、在宅介護法案、医療保険の自己負担の見直しなど大変ではある。

デンマークから始まったノーマライゼーション(障害者を特別扱いせず、正常な街の中の生活に組み入れること)では、鉄道などでも自転車、乳母車、車椅子なんでもそのまゝ積み込むので、障害者や誕生前の子供連れでも、汽車、船などを乗り継いで長期旅行を楽しんでいる。デパートや官公庁にスロープを作ったり、一部のバスを車椅子のまゝ入れる様に改造したのがニュースになる国とは違っている。

医療、教育、老人介護の無料など社会福祉は進んでいるが、忘れてならないことは、高福祉、高負担であつて、給与所得者は五十%の税金を徴収される。

生活関連のパン、チーズ、ハムなどは安価だが、煙草、酒、外食などは高い。

日本と同程度の煙草二十本入れ一箱二十九・五クローネ（一クローネ約二十円、六百円弱）、免税でも四百円弱くらい。

クロンボー城

クロンボーといっても黒人のことではない、「ハムレット」の舞台となった城。北欧では語尾の無音化することが多い（クロンボルグ、クロンボー、アマリエンボルグ、アマリエンボー、コペンハーゲン、クペンハウン）。



ハムレットの城

く。町のホテルの名前も「ハムレット」、コーヒーショップが「オフエリア」と名前もゆかしい。

四月はお城の開場が十一時、せっかちな寅は早く着いて、目と鼻の先にスウェーデン領が見える海岸に出てみると、沢山の人が釣りをしている。ルアーフィッシングで、大きなバラクーダを次々と釣り上げる。写真を撮っていると、お前も釣ってみたいかと言われたが、「釣るベしか、釣らざるベしか、それが問題だ」で、敬遠した。

十一時からの解説付入場者は、日本人一人、デンマーク人らしいのが二人、英語がわかるらしいのが二人。パンフレットを見ていると、英語の説明もなんとなくわかるが疲れる。

コペンハーゲンロータリークラブ

公式ガイドブックによれば、コペンには四つのクラブがある。旅行の日程からみて火曜日の昼に、コペンハーゲンシテイククラブが、ホテルインペリアルで例会を開くと書いてあるので、寅も一寸ドレスアップして会場を訪ねる。

「ロータリーの例会に出席に来た」「今日は例会はない」「幹事が代表は来て

いないか」「私達は知らない」、苦勞して幹事のアドレスに電話すると、「今週は日延べだ、来週来てくれればウエルカムだが」。冗談じゃないよ、こちとら旅人だぜ。

室蘭クラブからバナーを預かっており、コペンで例会に出るつもりと見得を切ったので後には引けない。水曜日は夕方にスウェーデンに出発するので気はせくが、水曜例会のコペンハーゲンクラブの例会場、ダングレテールホテルを訪ねる。このクラブは一九二三年（大正十一年）発足の名門、会場のホテルも帝國ホテルなみの超一流。

制服のコンシェルジュ子曰く、「いつもは当ホテルで開催するが、本日はモルケス・パレスで開催している」。何とか図示された場所に行くと衛兵の建っている宮殿、もう一度確かめると向いにある旧宮殿が会場。

二階に上がると執行部の連中がビールを飲みながら漫談中。室蘭のバナー、パンフレットなど渡すと、良く来た一杯やらないかとの事。

紹介された人達は、スカンジナビア航空の重役、医学部の名誉教授、弁護士な

コペンハーゲン中央駅から列車で約一時間でヘルシンガーという地方都市に着



ロータリー例会

ど。例会には他クラブからの女性会員も十数人。

ロータリーソング集は聖書ほどの厚さがあり、何と四百数十曲!! 教会の讃美歌に似ていたなあ。

食事はバイキング形式、皿を取り替えてのセルフサービス。バイキングのみの人は百クローネ、ビール、ワインなどを飲む人は自分の袋に規定の料金を入れる自主申告である。

オーデンセ

アンデルセンの故郷オーデンセは、鉄

道とフェリーを乗り継いで約三時間のフエン島。「ニクス」がモデルにした、イエスコウの城は、オーデンセから更に片道一時間半ほどかゝるので、残念ながら今回は敬遠した。

フェリーは近距離にしては大型で豪華、スタンドバー、ショッピングセンターもあり、乗客は船内の諸施設、外のプロムナードデッキエリアなどで自由にくつろげる。コペンハーゲンのあるシエラン島と、フエン島の間に白鳥大橋と同型の吊り橋を架橋中で、白鳥大橋の完成予



鉛の兵隊

想図を見て、同じ橋が間もなく出来上がると話していた。

オーデンセはおもちゃの様な町、アン

デルセン博物館には、古い写真や手紙などのほか関連する世界中の出版物や童話絵本が集まっている。一本足の鉛の兵隊の立っている街の民俗民芸品店で、北欧でよく見かける赤や青に塗られた木製の馬が何か意味があるのか聞いてみたが、早くから作られた代表的な民芸品で、特別の意味はないとの事であった。

昼食は「蒙古飯店」なる店で、ジンギスカンを食べてみたが、豚、牛、ラムなどの肉を野菜とともに皿にとって、好みのソースをかけてカウンターに運ぶと、調理場でフライパンで炒めて出してくれる。北海道の様な、野外でのダイナミックなものでない。

ストロイエ、ニューハウン、

アジア研究所

コペンハーゲンの「ストロイエ」は、小型ながらパリのフォーブル・サントノーレや銀座に相当する場所。「ロイヤル・コペンハーゲン」「シャネル」「アメリエ」など有名店が並ぶが、値段は高くまず敬遠。もっぱら「マガジン・デュノア」「イロム」などのデパートにて御用達。それでも付加価値税(消費税)が、二十から二十五%なので、税の払戻しは

馬鹿にならず、しっかりレシートを取っておくのが必要だ。

ニューハウンはアンデルセンも永く住んだ港町、帆船が帆を並べる運河沿いの町はなかなか風情がある。海鮮料理もムール貝、魚など美味しいが、ワイン共五千円位はする。

コペンハーゲン大学アジア研究所の、日本語学科の研修に出席してみた。

一寸上手に日本語をしゃべる程度だろうと馬鹿にしてかかっていたら、可愛い女の子が、「今、日本人の甘えの構造に



日本語語学生の一人

ついて論文を書いています」と来てまずビックリ。勿論原文を読んでおり、教師と三人で討論してみたが、日本人の心理

構造の時代による変化、特に戦後の変化、地域よつての差違から、漱石と鴎外の外国生活における対応の差違（ご承知の様に、漱石はロンドンでうつ状態になるが、鴎外はドイツ人の恋人ができて順応する）について述べたり、現在漱石は英文では読んだが、「心」か、「坊っちゃん」のどちらかを日本文で読む予定だと言っていた。

夏には一週間程日本で研修だとのことだが、日本の大学生も「心」くらいは読んでおかねば質問されるよ!!。

スウェーデンにて

一泊の予定でストックホルムに出かけた。アーランダ空港から市街までのタクシー代を聞くと三百五十クローナ（一クローナ約十七円で、およそ六千円）。空港バスはノンストップで六十クローナ（約千円）バスで結構です。

捜し当てたホテルの入口はロックされており、インターフォンで呼び出すと、当方の予約を確認の上、坂の五米ほど上に別のドアがあるから、そのドアフォンの一段目を、32・32と二回押せばドアロックがはずれる。中にはエレベーターがあるから、三階に上つて同じ操作

を繰り返して、326号に行けば鍵がついているとの説明。エレベーターは大部分の、手で格子網を押し開ける方式。特段のホテル以外はこんな宿が多い。

ワルブルギスの夜

ゲートの「ファウスト」では、メフィストフェレスがファウスト博士を、ハルツ山中のワルブルギスに連れて行く。また古代ワルブルギスでは、魔女エリヒトオがワルサルの野に連れてゆき、魑魅魍魎、スフィンクス、ふくろうなどが現れる幻想の世界。

ゲルマン世界で、古くから山の上で魔女の藁人形を焼いて、春の豊作を祈る祭は大分すたれてきたが、四月三十日夜ストックホルムの「スカンセン」で行なわれるのを知って、出掛けてみた。

「スカンセン」は「小さな砦」を意味し、北方民俗博物館の野外展示場として始まり、昔の北欧の教会、民家、山荘などを保存して（歴史の程度は異なるが、北海道開拓記念館に移設した旧建造物をイメージすれば理解出来る）、同時に古い民俗衣装の人達が作業をしている。

遅い飛行機だったので、街からは焚き火の明りが見えたのに、残念ながら雑踏

する人達の間をくぐって山に登っても焚き火は場所不明。家族連れに「祭りの火はどこ？」と聞くと、「ワイフも同じことを聞いているよ」で大笑い。残念でした、一時間後には又火を灯すとの事だが、夜遅くなり待てないので帰ることにする。

「スカンセン」の近くにヴァーサ号博物館があり、三百七十年前に処女航海で海没し、原型のまゝ引き揚げられた、千三百トンの超戦艦の勇姿も是非見たかったのだが!!。また来るよ。

ロマンチックストックホルム

数ある市内ガイドブックツアーから、表題のバスツアーを選んでオペラ座前から乗車、所要時間三時間、約四千円。

下車する所は旧市街の「ガムラスタン」のみ。ここには王宮や、ノーベル文学賞を選考する証券取引所、大聖堂、ドイツ教会などがあり、狭い裏路は一メートルくらいの巾しかない。

だが、「ガムラスタン」以外は車も止めず、ノーベル公園、市庁舎、スカンセン、グレーナルンドス・チボリ公園、日本大使館などを案内するのだが、なにせイヤホンから流れてくるのは英語、何

とかおぼろげにわかってその方向を見ると、もうはるか彼方。写真も思うにまかせない。

昼食はグランドホテルで、これもお目当の「スモガスボード」。所謂バイキングだが、驚くほどの豪華さはない。本場の「アクアヴィット」はアルコール四十二%、「スコール」で乾杯して、その後をビールで薄める。

短時日の観光は、やはり総花式のガイドツアーは失敗だった。バスガイドに就職するのでもないで、ポイントを選んで、スカンセン、ヴァーサ号、ガムラスタンにしぼるのが正解だったなあ。

マラウイ通信

（娘からの手紙）その二

大久保 洋平
（大久保病院）

私からは一方的にマラウイのリポートをしています、そちらからの手紙はいつも？の嵐なので出来る限り質問に答え

ます。

その一フラットについて

今度移ったのは前のフラットの隣の二階です。とても頭のいいウオッチマン（警備員）が居ます。彼は私でなく一階に住むMさん（7/2・※平成7年2次隊員、私は7/3隊員）に雇われているのです。Mさんが一階に居てくれるのでとても安心です。私の所には月水金にバンボー（ハウスボーイ）さんが来てくれて朝7時から夕方5時半まで家事と留守番をしてくれています。バンボーさんはアrikさんと言う人で何んとなくボーとしています。人柄は良いし正直そうなの、これからも彼にお願いするつもりです。私の前任者は寝室に鍵を掛け忘れて六千クワチャ（K）もバンボーに盗まれたそうですが、Arikさんは出掛ける時に鍵を掛けたか確認してくれるし、私が「自由に食べてね」と皿に置いていたクッキーも「二枚食べたよ、四枚残っているよ」ときちんと申告します。なかなか覚えてくれないアイロンの使い方、圧力鍋の蓋の開閉もきつといつか覚えるでしょう。何回でも教えましょう！

その二気温について

寒い時は寒いのですが暑い時は暑い。例えば夜にはストーブに火を入れますが日中は半袖でOKです。前にも書きましたが昼休みに病院の庭で昼寝すると日焼けして夜、布団に入ってもポカポカで安上がり、でも調子に乗っていたらシミ、ソバカスがいっぱい出来た。まあいいか……マラウイだからね。気温はもうマラウイの気候に慣れてしまったのでちょっと判らない。全て「クジジラ（さむい）」と「クテナ（あつい）」で済んでしまふので。

その三ラジオについて

今はラジオやCD等は全くありません。（※日本から持参した新品の短波放送ラジオは電源をONにした途端に故障してそのまま放置とのこと）。でもフラットの隣人が親切（？）な人でラジオやカセットを最大のボリュームで流してくれるので私の部屋はいつも音楽で溢れています。特にうちにお客が来てベランダに出たりすると「オークポォー！」と言って彼等もベランダに出てニコニコしてボリュームをもっと大きくしてくれます。最初はうるさくて嫌だったのですが最近は静かだと寂しいです。慣れって恐ろしいね。

その四 カゼはいつの間にか治りました。でもまたすぐにひくでしょう。質問コーナーは終了です。



今日病院のスタッフの一人が亡くなりました（たぶんTBかEDNIでしょう）。全然知らない人だけど一日に一人はスタッフや、その家族や親戚が死んでいる。同僚が「パンガニマルワ（花輪を作りましょう）」というので私もチテンジを着て花輪作りに参加しました。

なにせよく人が死ぬのでチテンジは必需品です。「親戚」もすごく多くてキッチンでも毎週スタッフの中の誰かが葬式に参加するために早退します。ちなみにマルワは真つ赤な花（けいとうみたいな花）で埋めつくされていて葬式というよりはクリスマス……って感じ。アマイ（ご婦人）たちは笑い乍ら歌を大声で歌い乍ら作ります。私が「日本では死者には白い花しか上げないのよ」と言うところ「ふん、なんで？」と聞くので「白は清潔や悲しみを表わすの」と説明したのですが彼等にとっては黒が一番ビュアでクリンな色という意識があるので、この説明は理解出来なかったようでした。また「ふん、なんで？」と聞かれても「何んでだろう……？」私も一緒に悩んでしまいました。七月十二日。約十日振りの手紙になります。別にサ



→ 中央の白い花



ボっていたわけではなく協力隊員のノルマ「隊員報告書」なるものを書いていたのです。これは三カ月毎に自分の活動についてJICAにレポートしなければならなという規則に基づいています。それにしても寒い。先週あたりはすごく暖かくて日課の昼寝を楽しんでいたりしたのですがここ数日は雪が降りそうな位の寒さです（……というのは大袈裟で本当は霧雨）。マラウイには天気予報なんてないので外に出てから「予想が外れた」と思

うことがよくあります。病院のキッチンにはドアがない（屋根はついているけれど壁一枚で外）ので仕事はブルブル震え乍らしています。でも職場の人にいわせると「あと十日で冬は終る」そうです。ホントかなあ？。

この冷え込みで亡くなる人も多く昨日は私のフラットの裏の家でお葬式をしていました。今日も病院内のあちこちから美しい歌声が聞こえてきます。死者を弔う歌声です。アフリカの人達は本当に歌が上手で伴奏もコンダクターも無いのに四部から五部合唱で神を讃える歌、自然を尊ぶ歌、弔いの歌などを歌います。バスの中で（気がついたら）私以外の全員が歌っていたこともありました。院内でも母子栄養教室では看護婦さんが先頭に立って「イワレ イワレ イワレ（母乳、母乳、母乳がいちばん）」なんて合唱するのです。本当に美しい歌声で日本人には逆立ちしたってマネ出来ない……と思います。

最近仕事も生活も一段落して、これといった出来事もないのですが少し悩んでいることがあります。それはドネーションです。この病院に來た日に総婦長

から「She'll donate us many things」と院長に紹介され「私がいつ誰に何を寄附すると言ったんだ!!」と驚いたのですが、どうやら私の前任者が「キッチンにクッカー（ガス台）をドネーションする」と口約束してJICAに書類の申請をしている途中で帰国してしまったらしい。一応後任である私の申請がないと病院はビター文JICAから貰うことが出来ないのではが非でも私に申請させたいらしい。確かにこのクッカーは殆ど壊れています。私たちJOCV（協力隊員）がJICAに頼めば一年後位にはクッカーが入るでしょう。でもクッカーが来ても今はクッカーに載せる鍋が無い。じゃあ鍋も一緒に寄附しよう……でも鍋とクッカーが来たって材料（食糧）がない。じゃあ食糧も買ってあげましょう……沢山の食材が入荷したとしても、その半分はいつのまにか盗まれてしまう。誰の何んのためのクッカーだ!!。今は食料が全くない。だから盗みも少ない。鍋もない。だから鍋も大切に使っているし盗む人も居ない。クッカーも動いているものは大切に扱われるし手入れされている。

実は去年他の病院にGeyser（湯沸器）

をドネーションした隊員がいました。キッチンでは大喜び。彼女も安心して帰国しました。さて一年後の今、その病院のギザーはまだ動いていません。水道工事にかかる費用を院長が着服してしまい、新たにその費用を捻出しようと後任のJOCVが走り廻っているうちにギザーそのものの保管状態が悪く錆び付いて使えなくなってしまったのです。多分もう使えないでしょう。ICAはカンカンに怒っていますが、それはJOCVだけの責任ではなく着服した院長だけの問題でもなく今のマラウイ社会の流通や経済問題もからんだ複雑な事情だと思っています。今日も婦長が「トモコ クッカーはいつ入るの？」と訊ねます。 七月二十一日。

昨日（八月七日）やっと荷物を受け取りました。どうも有り難うございます。郵便局からのNOTICEを受け取ったのは七月の終り、ブランドイヤ郵便局に二回行ったのに荷物が行方不明で結局リンベ（中央郵便局のある町）の郵便局にも二度足を運んで捜してもらい、ようやく四回目で見出されたのです。いい加減なのは頭に來てしまいます。さてそれから

が大変、小包を持って混み合ったバスに乗り揺られること三十分、自宅近くで降りしてもらい（バス停は有って無いようなもの）左手に職場の荷物、右手に大事な小包を持って、ほんの五分程の道のりを歩いたのですが、だんだん荷物が重く感じられ遂に頭にのせて運びましたが、これが結構楽なんです。マラウイアンは私を見て「アズング（外人）」といって大笑いしていたのでやっぱり下手だったのかしら。

いやあーやっぱり嬉しいですね。小包!! ゆうパックの箱だけでも「ダンボール箱だ、あつ紐が付いている!!」と大はしゃぎ。日本のダンボール箱は丈夫でフタ付きなので重宝します。開けてみてまた大賑ぎ。「あつほんだし、あらゆかり!! お弁当に入れよう。あれストッキングは要らないのにタイツと間違えたのかな? ああ靴下、のど飴もある。あつパンツまで。こっちは高いしデカイしペラペラだもんなあ……やつぱり木綿だよね。ネギ!! うどん作ろう。麦茶も作ろう。色鉛筆も二つあったら家と職場に置いておける!!……（色鉛筆セットに付いていた鉛筆削りは三日目に盗まりました）患

者さんのパンフレットも沢山作ろっと!!」と次から次へとほじくり出したのでベッドの上はまるで泥棒に入られた後のようにでした。

ここからは恒例の質問コーナーです。

一、マラウイのオリンピック選手について（※アトラクタオリンピックの開会式で入場行進した数人の選手団について）新聞によると彼等は陸上の選手だそうです。でもマラウイにはTV局がなくラジオも政府の方針でスポーツ関係のニュースは皆無なので、誰も彼等の活躍ぶり(?)を知ることは出来ません。唯一知ることが出来るのは衛星放送を持っているインディアン達でしょう。

二、ハウスボーイについて

私たちのようなアズングは通常ウオッチマン（警備員）を雇って夜6時から朝6時まで見張りを頼みます。ICAも月四百Kの補助金を出してウオッチマンを雇うようにすすめています。それとは別にハウスボーイも雇います。はっきり言って私は料理は自分で作るし洗濯物だってそんなないしハウスボーイなんて要らないと思っています。でも失業率80%、物価上昇率204%の今のマラウイ

では「アズング＝働き口」なのです。そして治安もあまり良いとはいえないこの国で女の一人暮らしで日中留守なのは「こそ泥さん、いらつしやい」といつているようなもの、そこで半分「私の留守中よろしくお願いします」という意味をこめてハウスボーイを雇うのです。私のハウスボーイ、アrikさんは月水金の朝七時から夕方五時半までの日中留守番として月額三百五十Kで契約、雇われています（私の月給は六千Kです）。彼はそのお金で奥さんと四人の子供を養っているそうです。彼には食器洗い、洗濯、掃除、アイロン掛けを頼んでいます、私の家は狭いので午後には特にすることもなく庭で他のウオッチマンやハウスボーイと日向ぼっこをしているようです。

ここに引越して来たばかりの時に一日に三、四人の大の男が「マダム雇って呉れ」と次々と押しかけてきて怖かったのですが、今のところアrikさんとはうまくやっているし、彼は「お金をもっと欲しいから毎日雇って呉れ」と言っている、若ししたら毎日来てもらうことになるかも知れません。アrikさんを雇っていることで普通のマラウイアンを

知ることが出来るとも言えます。

三、切手の件

色々な切手を楽しみたい……とのことですが紙不足のマラウイでは記念切手はクリスマスに発行されるだけのようです。いつも鳥の絵柄ですみませんが……。

八月八日。

久しぶりの手紙です。前号に書いたように十月初めに体調を崩し一週間休みました。近くの病院で診てもらったらマラリアでなくインフルエンザと診断されたのですが発熱から始まり、喉のはれ、関節痛、めまい、咳、嘔吐、胃痛、下痢、鼻みず……のフルコースでした。十月十一日～十四日は *Mother's day* による連休で隊員仲間十二人でレークに遊びに行く予定を立てていたのですが体力の回復を計らねばと……食べて寝て……の繰り返しでした。今も喉の腫れと鼻みずに時々悩まされているものの連休に暖かいレーク沿いで過ごしたせいか、カゼは回復しつつあります。ありったけの薬とトイレットペーパー持参の旅でしたがなんだか殺菌されたみたい。現在「*It*」は二ヶ月も逆戻りしたかのような寒さで雨も

降り始めています（本当の雨期は十二月から）。気候のせいかJOCVの間でも病気をする人が多いようです。

さて、先々週、今年の「家族視察の旅」のご一行様が訪れたので私も何人かの隊員のご両親と会ったのですが、皆さん一様に「思ったより都会で安全な国ですねえ」、「思ったより涼しいですね」、「思ったより食事が美味しいですねえ」、「見るもの見るものが全てが珍しくて」と半年前の私と同じ印象のようで少しマラウイアン化してきた私には凄く新鮮に映りました。びっくりしたのは私の方で日本から来られた皆さん色が白いこと!!。私は日中キッチンで仕事をしているので日焼けせず、隊員仲間では一、二を競う白さ……だと思っていたのですが、この方々と一緒にだと随分黒い。自分がこんなに日焼けしていたのに気付かなかったようです。「視察旅行」の皆さんマラウイを充分楽しんで安心して帰られたようです。来年は是非来てね!!。ではまづは全快報告まで。

十月十八日。

こちらは最も暑いシーズンに突入しました。私の体力も極限状態のようで十月

は通院すること二回、眠れない程激しい下痢が三回、発熱することたびたび……とさんざんでした。

仕事の方もそれなりに忙しくて暑くて不衛生なキッチンが地獄のようです（恐怖映画のヒロインになったみたい）。毎日卵に生えたカビを洗い無数のウジを拾い（本当に泣きそうになった、怖かった）、ゴキブリとハエとアリにまみれたトマトをキヤーキヤー言いながら洗っています。

カビが生えた卵は洗えばいいしウジが湧いたら捨てればいい。でも化膿している患者は洗うわけにも捨てるわけにもいかず、かといってガーゼも薬も無く……血と膿にまみれ異臭を発する患者達をみると、これでも本当に人間として扱われているのか？と思うこともしばしばあります。毎日アシスタントと広い院内を廻り、特に症状の重い患者をピックアップして貴重なホントに貴重な十ヶ〜二十ヶ（それしかない）のゆで卵を配り、DMやHTの患者につたないチェワ語で食事指導（？）して、時にはドクターやナースと言いつたりします（彼等は私からみると本当にいい加減です）。グキッチ

ンスタッフに栄養教育をする”たつて材料も無いのにどうやって教育するんだ。実行出来ないのに!!

本当にマラウイのために栄養教育するのなら農業や漁業にお金を掛けて食糧増産を目指して貧しい人や弱い人達に食料を与える、もしマラウイアンの病院栄養士を育てたいのならMOAが私達に使うお金をマラウイアンに上げてケニアか南アの大学で勉強させて資格を取らせてあげないと、これからも栄養教育は何ら改善されなと思います。それが証拠に私がキッチンに居ても居なくても誰も困らないし食事指導だって流暢なチェワ語やヤオ語でやった方がずっと理解される筈です（アズングの私がチェワ語を話すと娯楽に飢えているマラウイアンは大よろこびですが）。私自身は日本政府からお金を出していただいて貴重な体験をさせて貰っているのですが、その分、現地の人の仕事を奪っているのですから、つい深刻に考え込んでいます。

十月二十五日。

この手紙が届く頃はお正月もう半ばです。すぐく久し振りの手紙です。私

は十二月十五日から二十九日までクリスマスホリデーで休暇を貰い楽しみました。今日はその報告です。

今回のホリデーのメインはマラウイ湖に浮かぶ離島リコマ島への四泊五日の船旅（”神々のいたずら”で三浦洋一さんが訪れたコースと一緒です）。メンバーは男性七名、女性五名の総勢十二人の隊員仲間です。

十二月二十一日。朝九時コタコタ発のイララⅡ号（マラウイ湖唯一の豪華客船？）に乗り込み、いざ出発。雨期のため天気はいまひとつで肌寒かったのですが船のランチはおいしかった。午後二時頃リコマ島に到着。しかし下船するのにひと苦労。なぜなら船着場がないためイララ号から小舟（モーターボート）に乗り移り、さらにリコマ島の漁場のような所にボートが着けられボロボロの梯子で陸に降りる。しかし降りる客と乗る客とが梯子を同時に利用するので大混乱。私は荷物を持ったおじさんに突き飛ばされて湖に落っこちそうになったところを先輩隊員に助けられました。

リコマ島は電気のないのどかな美しい島でした。夕食は自炊したカレーライス、

ジャパニーズカレーはやっぱおいしいかった。夜六時頃になるとローソクやランプを灯します。

下船のしかた



① 船から中に浮いているボートに乗りうつる。80cmくらいすき間かあいているので、高所恐怖症の人には大変!!



② 島までモーターボートで運ばれる。足るふき場もない程、人が乗る。まさにボートビートル!!!



③ ボートからぼしこ(ふみか)にのりうつり、岸へ。しかし、人でごった返しているので湖に降りる人、落ちる人、多数……

十二月二十二日。日曜日といえば教会。クリスマス直前だったのでクリスマスミサを見学することが出来ました。一メートル以上もあるローソクに火を灯し司祭は皆正装し、それはそれは素敵なミサでした。言葉は全てチェワ語ですが歌詞カードを貰ったので皆さんと一緒に讃美歌を歌いました。

十二月二十四日。今回のもう一つのイベント、それは「グコマの神」と呼ばれている(ホントか?)アフリカンドクターに会うこと。アフリカには沢山の無資格の自称ドクターがいて私達は「ドクタープロクター」という人の家を訪ねてみました。Witch doctorは呪文や怪しい薬などを使うという噂だったので何が出て来るのか楽しみだったのだけれど実際に見たのは祭壇のようなもので、後はドクターの歌(熱唱!!)とお祈り、そして彼の自慢話ばかり、一応英語の通訳がいたのだけれどヘンな英語でよく理解出来ず、またドクター自身も南アフリカの友人(?)から国際電話が入ったと言っている、しよっちゅう席を立つので私達は呆れてしまい昼過ぎに戻って来ました。そしてその夜十一時頃に五時間遅れの

帰りの船が到着、私達は下船の時以上に苦勞して乗船したあと約三十時間の湖上の船旅を楽しみました。なぜあの小さな湖で三十時間もかかるのか……答えは簡単、一つの町に寄るたびに四、五時間は停泊するからなのです。私達は南部のモンキーベイという町で降りたのですが途中四ヶ所に停りました。しかし船内にはお湯が出るシャワーがあり、レストランやカウンターバーで食事やお酒を飲むことが出来るし、何よりも湖は海のように揺れないので三十時間の間、夕焼けを見て、星空を仰いで朝日の美しさに感動しているうちに着いてしまいました。JOCVはボランティアと気負っているけれど、ここではやはりリッチなアズングの一人です。

マラウイは一月一日以外はホリデーではないので年末年始もいつもの仕事をすることになります。さんざん遊んだのだから仕事の方も頑張ろうと思います。

十二月三十一日。

外国の医療現場で働いてみて国民のみんなが公平に医療を受けられる日本の医療制度は素晴らしいと思います。QECH

もそうですがマラウイの国営病院は医療費がタダです（外国人ばかりの有料病棟はありますが）。一見理想的なようですが、 Δ が幾ら来ても何ら収入がない……ということは時にはスタッフに Δ に対するいたわりの気持ちを失わせ薬品や材料備品、食料もあるもので、ある分だけで間に合わせてしまっています。全ての物が不足しているのに残っているうちはタダで Δ に渡される。院内から薬などが持ち出されて街で高く売られています。全額を Δ に負担させないまでも少しでも有料化して病院の収入を生み、 Δ にも「治療代」を認識させる必要があると思います。貧しい人達の中には街で法外に高く売りつけられる薬を敢えて買ったり、村に住むアフリカンドクターに五十Kとか百Kの信じられない程の大金を治療費として支払っている人も居るのです。病院がたとえ五Kでも Δ から医療費を支払ってもらうと必ず Δ に対するサービスは向上するのと思うのですが……。とDM外来の Δ を待っている合間にこの手紙を書いていたら突然「dietitian!!」と呼ぶ声が。 Δ の一人がHypoglycemiaで倒れてしまったのです。でも今キッチンには砂糖が無

いんだよ、信じられる？。結局私が自腹を切って砂糖を買った。 Δ は元気になりました。よかった。

今日の栄養相談は六人でした。

一九九七・一・二十八。

さて三月も後半です。マラウイも四月は年度始めで予算折衝の時期なのです。キッチンも政府やJICAにドネーションを申請します。私は本当は機械よりも食材を……という気持ちなのですが私の活動テーマが「病院スタッフへの栄養教育と衛生状態の改善」なので今回は「衛生状態の改善」にかこつけてトロリー（食事配膳車）を導入してもらおうと思っています。というのは各病棟が食事を受け取りに来るのは荷物運び用の台車で、それまでの間、出来た食事はバケツに入れられキッチンの床にボンボンと置かれていたので雨季になるとハエや蚊、ゴキブリがダイビングするのです。布を掛けておくくと布が床に触れるので朝はまだしも夕食の時にはもう真っ黒、こんな布なら掛けない方がマシって感じです。遠い村からやって来て入院して空腹をこらえて待っているのに、こんな食事を食べさせ

られるなんて!!。患者さんに申し訳ない。私はトロリーのドネーションを申請します。

病院側からの日本に申請する書類を見せて欲しいと頼みました。その申請書類を見てビックリ!! HIVの増加にともない検査部門が530,000USドルを希望とある一方で、我がキッチン部門からは一・ミキサー、二・トロリー……そして包丁十二本をJICAに申請とある始末、ついに上司に「包丁まで日本政府に申請なんか出来ない。ここで用意しなさい」と断りましたらガッカリしていました。

三月十九日。

現在マラウイはちよつと異常事態にあります。四月七日から賃上げ要求のために公務員（約六万人）がストライキに入っているのです。勿論、当病院もストで外来は救急を除き閉鎖され、各病棟は医師一人、看護婦一人という有様。でもキッチンはお局さまの「ストには賛成するけれど食事を出すのは私達の義務だ」との一声で、本当はストをしたい（働きたくない）スタッフが毎日出て来るのだから大したもの。国立の病院も薬を

貰う国営メデイカルストアもストライキ中なので死亡する患者も多くなっていました。通常なら死者はストレッチャ―でモチャーレ（霊安室）まで運んでもらえるのに今はそれもなし。患者の命より自分達の賃上げを選ぶ身勝手さ無責任さには失望してしまいましたが、医療人のモラルとか誠意なんというのは、ある程度の豊かな生活が保たれていて口にする事が出来るのでしょね。私は 黙々と日常業務をこなすだけです。

こんな状況なので仕事は適当にやっています。来月になるとカウンターパートのクムエンダさんの日本研修の申込みや面接テストがあるので、そちらの方が忙しくて二人で栄養学や日本語の勉強をしています。いやあ人に教えるってことはすごいね（それも英語で）。私の幼児なみの英語を聞かされるクムエンダさんが気の毒に思う時もあるけれど決して「英語が下手くそでごめんね」と言わない。「私は下手な英語で一生懸命に教えているのだからあなたも一生懸命勉強してね!」と言っています。それがマラウイ流なのだ。もっとも「今日は調子がいいや、英語もスラスラ出て来るし……」

なんて浮かれてしゃべっていると彼女は居眠りしているから、つかえつつかえやるのも「マラウイ流」なのかも知れません。
五月十九日。

平成九年度 MMMCドライブ会

塩澤 英光
(東室蘭医院)

八月十日（日曜日）MMMCドライブ会が行なわれました。今年は、会長が肝臓病でご自分の病院を休業なさり、療養なさるといふ異例の事態で年度が始まりました。急遽、名誉会長に打診したところ、「やはりこの場合、会長の同意を得たあと、副会長に一任するのが常かと……」とのこと、次に、副会長の意向をお訊ね申し上げたところ、「総会は開かればならないが、自分は健康上の問題から

役員を辞任したい……」、廻り廻って旧会長の鴨井清一先生に、お願いするといふ緊急事態となりました。

六月十六日MMMC幹事会兼総会が開かれました。参加者は、鴨井清一先生、鴨井清貴先生、遠藤孝二郎先生、新会員になられた千葉泰二先生と私の五名で、委任状三十五通とで過半数以上とし、総会が開かれました。

ドライブ会の行き先は、第二十二回の余市と第三十回に行った羊蹄山のふきだし公園、それに余市のニッカウイスキー工場見学ということに決定され、地図はふきだし公園までは会計の私が、以後余市までは幹事の鴨井清一先生が画されました。

八月十日朝八時半、本輪西駅を、鴨井清一先生と鴨井外科の看護婦さん二名、鴨井清成先生父子と私で、車台数三台、総人数六名のメンバーで出発しました。洞爺湖経由で羊蹄山の麓の京極町にある、全国名水百選にもなっている「ふきだし公園」に行きました。天気も上々で、以前は砂利だった駐車場も整備され、道の駅や公園施設も拡充されて変わっていましたが、名水も名水コーヒーも味は昔

のままで、何故かホツとしました。

次に、俱知安町を通つて、国道五号線を余市に向かいました。余市に入りすぐ、ニッカウイスキー北海道余市原酒工場に行きました。日曜日にもかかわらず、多くの見物客が列をなし、三十分間隔で行なわれる説明会及び引率にも十五名二十名の参加者があり大変賑やかでした。話しによると、ブドウからの仕込みを始めた当初、ウイスキーが出来るまで食いつなぐために、ブドウ液を売っていた為「日本果汁産業株式会社」という社名であり、その一部の日果より、ニッカの名前が生まれたと聞いて、良く納得出来ました。

トウモロコシや大麦から作られるカフエグレーン原酒とブドウから作られるモルト原酒をブレンド後再び樽に寝かせる再貯蔵や、微粉炭（石炭）でポットスチル（蒸留機）を直接過熱する「直火焚き」という方法は、あのスコットランド人ですら諦めてしまった製法である聞き及んで、つい、いつもは飲まないウイスキーを買い込んでしまいました。最高級の「鶴」は、さすがに高価の為、ミニボトルにした次第です。工場の一部は前

日の大雨のため水没しており、見学出来ない場所もありましたが、野鳥（白鳥？）はかえって喜んでいたようです。

次に、鮎料理を食べに、水明閣に向いました。余市町の「ホテル水明閣」は、ニッカウイスキー工場より国道五号線を少し室蘭側に引き返した所から山側に入って行き、住宅街を貫け、町もはづれになり、こんな所に大きな料理店兼ホテルがあるとは思えないような所にありました。周りは、用水路（川？）と畑と住宅に囲まれた静かな場所、料理は有田焼の鮎の形をした器に盛られた鮎の白子の塩漬け（？）、鮎の叩きの酢みそ和え、鮎の塩焼き、鮎の天ぷら、鮎肝のお吸い物、鮎の刺し身等、鮎づくしで、一人前四千五百円の料金でしたが、ボリュームは十分でした。箸置きも鮎の形をしており、雰囲気作りにも気配りが感じられました。

入浴料は無料にしてください、さっぱりしたお湯につかって上がり、帰り際に、鮎の有田焼（実は珍味用の器）を四千五百円で買いました。木彫りとも金属製とも、プラスチック製ともビニール製とも違う独特の質感が気に入ったためです。

次に、清一先生の発案で、国指定史跡重要文化財旧下ヨイチ運上家を見学しに、北に向かい五分程車で走ると、漁港の片隅にありました。入館料は自前です。

親切な案内人が、運上家の説明をしてくれました。説明によると、松前藩では米の収穫がまったくなかった為に、家臣に対し、蝦夷地を八十数カ所に区分して与え、そこに住んでいるアイヌの人達との交易による収入を家臣の給与（禄）としたそうです。その家臣は、その交易の権利を商人に委託し、商人に一定の契約金を納めさせました。それを「運上金」と言つたため、場所請負人が交易場所に建てた建物を「運上家」と言うようになったそうです。運上家は、公文書の取扱いや役人、通行人の宿舎、難破船の救助など松前藩の出先機関のような仕事をするようになり、役所的性格を強めました。一時は道内に数十カ所あったとされていますが、現存するのはこの「旧下ヨイチ運上家」只一つとなったそうです。

館内には、その当時そのままの人々の仕事ぶりを等身大の人形として展示しており、リアルでした。働いていた人の中には罪人も居たらしく、二階から一階へ

降りてこられる階段は一つきりで、逃亡防止の為だったそうです。その他、船主はここではお客さんで、別格扱いだったとか、トイレの金隠しは、実は着物のそでを載せる為のものとか、展示されている陶磁器の中には百万円以上するものもあるとか、「三平皿」の由来とか、詳しく説明して下さいました。

私としては、トイレの窓の格子や、薄い板で葺いた屋根の上に、風で板が飛んでいかない為に置かれた苔むした石が、大変懐かしく思われました。

文化三年旧暦の四月頃には、テレビ時代劇でお馴染みの名奉行「遠山の金さん」の父である遠山金四郎景晋も滞在していたそうです。

建物自体は、封建時代の身分制度を強く反映したもので、入ってすぐが客人（船主）の室、台所、帳場となつて、偉い役人ほど奥の部屋となつており、商人と侍では、出入口まで別という具合です。運上家見学のあと鴨井先生たちと別れて、私はよいち水産博物館へ行きました。

よいち水産博物館は丘の上にあり、建物の一部には通商船の前部が突出しており、一階には弁財船（北前船）の二十

メートルほどある模型と歴史が展示してありました。船の構造も段々西洋のキール（船の骨格）を持つようになり、帆の形も変化し、枚数も一枚から三枚と変わっていく様は大変興味深かったです。他に、漁場で使用された浮、網、縄、馬ソリ等の大きな物の展示があり、二階には、アワビからつくった人工真珠（イミテーション）や、ニシン加工に使われた種々の道具の展示、ニシン漁最盛期の村のジオラマと当時としては珍しい分業の数々、例えば、ニシンを大きな生け簀で保持する係、ニシンを乾燥させる係、ニシンをさばく係、ニシンを蒸して油を作る係、ニシン漁でも大きな網でつくったトラップでの、それぞれ魚を追い込む係、網をしぼめていく係、浮を設置する係、魚を取り込む係、またその取り込みの際に使うクレーン様の大きな木のシャベルの操作係、魚を運ぶ時の「しよいこ」（木で作られた魚を入れてはこぶランドセル様のバッグ）にも大人用、子供用とあり、ニシンを加工する一大コンビナートと言えるような感を強く持ち、分業の素晴らしさに感激しました。

なお、三階には町内の遺跡から出土し

た石器、土器、鉄器が展示され、他に二メートルほどもある「おひょう」の剥製、道指定文化財の天内山遺跡出土遺物、登川遺跡出土の兵庫鎖等があり、その部屋だけ余市町歴史民族資料館と別名になっており、屯田兵やアイヌの類の展示もあり、室蘭の民族資料館を思わせる内容でした。

その後、鮎の置物を持って、洞爺湖経由で帰郷しました。大変有意義な旅だったと思います。もし、興味を持たれた方がございますれば、是非とも一度余市町に來られると良いと思います。

新会員・自己紹介

自己紹介



千葉泰二

(三愛病院)

平成九年四月より、伝統のある室蘭市医師親交会に新たに入会させていただきました。ありがとうございます。

私は昭和六十二年東邦大学医学部を卒業後、現在北海道大学名誉教授であります山下格先生の下で精神医学を志したく、北海道大学医学部精神医学教室に入局させていただきました。

入局後、一年間の大学研修を経まして、十勝にあります北海道緑ヶ丘病院で、三

年間地域精神医療など多くの臨床研修をさせていただきました。その後、私の父親の強い希望もありまして、平成三年四月より父親の経営しております三愛病院に勤務しております。登別での生活は、高校時代以来となりますので約十一年ぶりに帰郷したこととなりました。

三愛病院が開設された昭和四十年当時を思い出しますと、父親と薬剤師である母親のそれは家族的な病院でありました。現在は精神病院の他老人保健施設や特別養護老人ホームなどがあり、約三十年間にわたる歴史的な進歩に驚くとともに、今後の責任の重大さを痛切に感じているわけでございます。

私の専門は、精神科・神経科でありますので、子供から老人まで全般的な精神的治療を目指しております。今後は、精神障害者の治療・リハビリは当然の如くして、思春期の子供達に対する治療や痴呆を含めた老人医療全般にも力点をおきたいと思っております。

医師親交会への入会が遅れましたのは、帰郷した当時が若すぎまして医師会事情がよく理解できなかったためでありました。今後は医師親交会などとおし

まして少しでも他科の先生方と交流出来ればと思っております。

趣味は、ゴルフと家庭菜園であります。ゴルフは、大学時代から時折おこなっておりましたが、根気のない性格が影響しまして現在でもそれ程上達しておりません。しかし、日頃の運動不足の解消と気分転換にと一月に二回程度プレーしております。現在も室蘭市医師会ゴルフ会のメンバーではありますが、なかなか忙しくて参加できません。今後は積極的に参加したいと思っております。また、以前から野菜を作ることに興味がありまして、高校・大学時代は余裕が無くしばらく御無沙汰しておりましたが、五年位前から自宅の前庭を利用して小さな畑を作り、大根・枝豆・赤かぶ、ミニトマト・キュウリなどを栽培しております。家庭菜園は、作ることと食べることの二重の喜びを味わえるもので、手頃なストレス解消になります。

家族は、妻と一歳になる男の子がおります。子供は毎日元気に動き回っており、成長していく姿を見ることはなんとも微笑ましいことです。そんなわけでまだ十分な家族旅行はできません。もう少し子

供が成長がしましたら家族で医師会の行事に参加することもあるかと思いますが、その節はよろしくお願い致します。今後なにかとご面倒な事もかけるかと思いますが、家族共々よろしくお願い致します。

以上で、簡単ではございますが、自己紹介のご挨拶とさせていただきます。

はじめて、
ご挨拶です。



大平整爾

(日鋼記念病院)

岩見沢市に生まれ育って生涯のほとんどを彼の地で過ごしたのですが、ご縁があつてこの四月から日鋼記念病院に勤務しております。昨年十一月二十一日熊本市の講演会に招かれ、連休があとに続くこともあつてこの種の旅行としては初めて女房殿を同伴いたした次第です。講

演はまあ無事終了し、後はレンタカーで熊本市内と阿蘇国立公園のあちこちをいつになく優雅にドライブいたしました。阿蘇山・九重山の美景が今も脳裏にあります。

さて、熊本空港からは羽田で乗り換えて千歳へ向かいましたが、北海道へ至ると頗る快晴で日胆地方が手に取るように鳥瞰できたのです。この時、機内で家内がこの辺りにも一度住んでみたいわと言ったからでしょうか、大学の尊敬すべき先輩西村理事長から思いがけないお誘いを得たのです。

広島市内出身・阪大卒の父親がスキー・ハンティングを一時したいという理由で、北海道へ渡ったのが昭和の初期でした。

私は何の疑いもなく医学の道を目指し、北大医学部を昭和三十七年に卒業、インターンを都下立川市の今はいない米国空軍病院で過ごしました。二十四時間英語浸けの一年間はストレスフルではありましたが、全国各地から集まった医学生との交流が持てて今に財産となっておりです。その当時は余り感じませんでした。その当時がアメリカのドクター連は言葉の

たどたどしい我々の面倒をよくよくみてくれたと感謝しております。現在、若い医師を一応指導する立場にありますが、このことを痛感いたします。「教える」ということには相当に、エネルギーが要ることです。さて、インターン終了後、故葛西先生・同郷の能勢・今西先輩の勧めもあつて第一外科に入局いたしました。大学入学のその年に母を劇症肝炎であつと言う間に失ったことも『肝臓外科』を専攻する一因であつたと思います。医学進学課程を終了して医学部へ進んだのが昭和三十三年で、この年医学部に野球部が創設されました。東日本医科大学体育大会が生まれて、これに参加しようということのためであつたようです。

最高学年には三十五期の大久保洋平先生がおられました。昭和三十三年の夏、東日本大会の遠征資金を寄付に頼るべく部員が全道に散りましたが、私は同級生の大柳君とこの室蘭地区が割り当てられました。大久保先生のお父様の医院へ真つ先に参り、昼食を御馳走になったうえに多額のご寄付をいただきその上、地球岬へのご案内もあり、感謝・感激で帰学したのを鮮明に記憶いたしております。

思い返せば、野球・野球の四年間でありました。二回の優勝は我が平凡な人生を鮮やかに彩ってくれています。さて、大学院を終えて地元の岩見沢市立に落ち着き、ここから昭和四十三年カナダはトロント大学へ留学いたしました。留学先のラポルト教授は彼の地で「liver man」と尊称される肝臓生理学の大家でした。口うるさい方でしたが、公平なacademic manであり、疲れ続けた毎日でした。引つ込み思案な私も、自己主張やまないaggressiveな男にならざるを得ませんでした。

さて、一外が将来の『肝臓移植』を見据えての私の留学でありましたが、三年間の帰国後も『肝臓移植への道』は遥かに遠く遠い状況でした。

岩見沢市立に再び腰を据えました。胸・腹部外科の傍ら、本場クリーブランドで人工腎の研鑽を積まれた今 忠正先生が開設し、全道から腎不全患者が引きも切らない透析センターをお手伝いする羽目に相成りました。

肝移植が当分難しければ腎移植、そのためにはまずは慢性腎不全患者を診ようというわけでした。かくして、慢性腎不

全医療という分野に足を踏み入れ、今日に至ったという次第です。この度、北大一外に肝臓移植の大家 藤堂先生が教授として赴任されたことには、大いなる感慨を覚えます。

室蘭へ移り住むことには迷いも大いにありましたが数カ月を過ごしてみますと、日鋼記念病院―予想に違わず活動度の高い病院でやり甲斐はあります。ただ、これまでと異なる経営母体・医療への意識の違い等々戸惑うことの多い日々であり、理事長その他の職員の方々に「input」されっぱなしで期待されている「output」をいつの日になし得るか懸念もいたしております。着任後日も浅く未だに五里霧中なのですが、幸い当市医師会には大久保先輩やかつて教室で同時期に仕事をした斎藤会長がおられておくばりを賜っており感謝しております。また、下手の横好きで駄文をあちこちに載せていた小生の名前を記憶して下さっている先生方もおありで、『芸(?)』が多少とも身を助けております。

さて、平地に住み慣れた私には、この地は小高い丘に富み周囲を海に囲まれ変化に富んだ地形であり気象と言えます。

イタンキ浜・地球岬・白鳥大橋など息を呑む美しさに飽きることとてありません。仕事に励みながら、同行してくれた妻共々この地の人々・自然に接していくことを楽しみにしております。

わがぼぼ一生の記



大宮彬男

(室蘭保健所)

自己紹介として、趣味等又はわが半生記的ということですが、還暦を過ぎた身には人生の最終局面にさしかかりいかにも収束するかが最大の関心事であります。この夏も、太平洋戦争の終戦記念日が巡ってきて、毎年のことながら感慨を新たにしています。

私は札幌に生まれましたが、物心つかないうちに満州の首都新京(現中国吉林省長春)に移り住み、小学三年の時終戦

を迎えました。ソ連軍が一週間前に日ソ不可侵条約を反古にし参戦し、怒濤の勢いで南下している緊迫した状況にもかかわらず、天皇の詔勅はまことにのんびりとした声で何を言っているのかはつきりせず、「人間離れしている、さすが現人神だ」と妙に納得したものです。

傍にいた母が泣き出したので「やっぱ日本は負けたのだな」とはじめて思い知りました。わが国は神州不滅でいかに戦利あらずともいざというときには必ず神風が吹くなどとは、子供心にも何やらインチキくさいと感じていたので、ホッとしたのが偽りのない気持ちでした。次の瞬間、父が兵隊に取られていたので果して祖国へ帰れるのだろうかと不安におそわれました。外に出て杜宅を一廻りしたときの、シーンとした不気味な静けさはいまだに忘れることができません。暑い夏の日の昼下がりでした。

ソ連軍の駐留やその撤退後の国共両軍による市街戦もあり、長春へなだれ込んできた難民（棄民というべきか）の群れの非惨さや、道路にころがっている屍体も目にして、一種の諦観のようなものも抱きました。それでもほぼ一年経って、

幸い残留孤児にもならず一家揃って引き揚げてくることができました。憧れの祖国に近づくにつれ箱庭のように浮ぶ鳥影を船の上から見たとき、そのしたたるような緑に何という美しい国だろうと茫然としておりました。

その後、恙なく札幌で過し高校卒業の時に一生の進路を決めかねて色々迷い廻り道もしましたが、結局は昭和三十九年札幌医科大学を卒業しました。一年間のインターンの後、やりたかった臨床科がなかったわけではないのですが、学生時代余り勉強しなかったもので、それを取り返してみようなどと殊勝な気になり、国家試験の翌日から基礎医学（薬理学）研究の道に入りました。朝早くから夜遅くまで実験に明け暮れたあの頃を、夢中に過せただけに懐かしく思い出されま

す。
昭和四十六年秋に、私を研究の道に誘ってくれた先生が新設間もない秋田大学医学部へ教授として赴任することになり、とても研究者として独り立ちする自信のなかった私は請われるままについて行くことになりました。助手の身分のまま月給も二―三割安くなるのもかまわず、

「士は己を知る者のために死す」の気概で母を一人家に残して単身津軽海峡を渡ったものです。

秋田大学医学部での研究環境は、創成期のことでもあり厳しいものがありました。物的な乏しさは当然のことで厭うものではありませんが、人的な環境の悪さには泣かされました。一言でいって秋田は東北大の植民地であり、自校で賄えない分をあてがわれた体の教授ですから、助教授・同僚の助手は押しつけられたもので、意のままになったのは私の助手だけというのですから情けないものです。同僚の行きどころのないオールドミスは、東北大（薬）出身というだけが心の支えで朝夕の挨拶もロクにできない性格異常者で彼女に私のエネルギーの大半を消耗させられました。二度と思い出したくない馬鹿々々しい日々でした。

秋田に計二十年間いたことになりましたが、この間二回合わせて三年半アメリカで研究生活を送れたことが不幸中の幸いでした。毒薬物の肺毒性発現機構に興味があり、その解明のため動物の単離灌流肺標本の技術を習得にミシシッピ―大学に行ったのがきっかけでした。

平成三年九月に、中国大連医学院へ集中講義のため招聘されました。朝八時から夕方まで三週間ぶつ通しで、日本語クラスの学生に講義しました。毎晩深夜まで中国語の教科書とにらめっこしている

と大体意味が分ってきます。翌日、日本語の教科書と対比しながらゆっくり説明したので理解しやすいとの評判でした。

この大連滞在中に、白求恩医大を訪問し研究上の意見を交わすことを表向きの理由にして、思い出の地長春を再び訪れる機会が与えられました。真つ赤に燃えた大きな夕陽が半世紀前と変わりなく大地の果てに沈むのを目にしたとき、涙が流れ出すとともに残り少ない人生の生き方を考え、思うほど成果を挙げられなかった研究の道を断念する決心がつかしました。

三十年近くも棚で埃をかぶっていた医師免許証を取り出して、衛生行政の道に入ってまだ六年足らずですが、道民の健康の保持増進に奉仕できる毎日にこの上ない満足を感じております。

(平成九年八月盛夏記)

私の略歴



松田史明

(とんけし耳鼻咽喉科クリニック)

私は昭和五十七年に札幌医大を卒業いたしました。札幌大の二十九期にあたります。今年の三月まで函館五稜郭病院に勤務し、四月十五日富岸町にて耳鼻咽喉科クリニックを開院いたしました。今後ともよろしくお願いいたします。

私は昭和二十七年真狩村で生まれました。父が国家公務員でしたので転勤が多く、どこ出身かよくわからない状態です。東瀬棚(現在の北檜山町)に小学校一年までおり、その後一年間だけで中央町の方が栄えていて、よく両親とバスで中央町まで出かけて、デパート等で買物をするのが嬉しかったことを憶えております。小学校三年のとき岩内町に移り、中学二年までおりました。子供の頃の思

い出としてはこの頃のことが一番印象にあります。この頃はよく喉を傷めたり熱を出したりして岩内の病院をよく受診しました。その医院は前田先生(故人)といわれ内科も外科もこなすスーパーマンのような方でした。その医院の奥の手術台のうえに、摘出された虫垂のホルマリソンのピンを初めて見たときの驚きと好奇心は今でも忘れません。今まで経験したことのない世界に憧れたことが子供心に医者になろうと思った一番のきっかけだったと思います。

その後、函館への転勤となり高校卒業(函館東高校)まで居りました。高校卒業後は、予備校を経て札幌大に入学となりましたが、何度も留年スレスレの状態をやつとの思いで卒業できた次第です。

卒業後は学部三年の頃から既に耳鼻科へ入局しようと決めておりました。耳鼻科を選んだのは、もともと自分自身が耳鼻科の患者でよく診察していただいていたこと、耳鼻科という将来性のある科であること、形浦教授の熱血感などところ等と思ひます。特に形浦教授が講義の途中で階段を駆け上がり、一番うしろの席で国試の勉強をしていた者の側にすつくと

立ち「男らしくない!! 正々堂々とするんだ」と叫んだ言葉が今でも忘れられませんが。「いい人だな」と感激いたしました。

卒業後は、空席があり耳鼻科の大学院に進学し、研究テーマである扁桃リンパ球の細胞周期の研究をさせていただきました。不勉強・生来のなまけ者のため何度となくリンパ球の培養に失敗し、リンパ球のかわりにカビを培養するはめになったり、フロートサイトメトリーのレーザーを破壊したりと失敗続きの状態でした。やっとの思いで四年間で論文をまとめることはできたのですが、その論文も三日間、寝ずの徹夜で、妻にもタイプ打ちの手伝いをして貰いながらできた次第です。

すべて、やっとの思いでここまで来れましたが、市立室蘭総合病院でのつごう四年間、五稜郭病院での五年間の臨床経験を生かして、現在の診療をマイペースでやっていこうと考えております。

編集室へのお便り

今年も残り少なくなつて参りましたが先生には御元気で御活躍の御様子何よりと存じ上げます。

この度は私にまで御心かけていただき、波久鳥賜わり厚く御礼申し上げます。

医師会は遠い存在になりましたがおなつかしく拝見させていただきました。

どうぞあわただしい日々御身御自愛遊ばす様御礼まで。

室蘭市母恋北町二―三―一五

竹内 幾子

(八・十二・十二)

拝啓 時下益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

このたびは、下記資料を御寄贈下さいましてありがとうございます。貴重な資料として保存し、広く活用させていただきます。

なお、今後とも引き続きご惠送くださいますようお願い申し上げます。 敬具

室蘭市知利別町一―四十五

新日鐵室蘭総合病院

(八・十二・十三)

「波久鳥」お送りいただき有り難うございました。早速米澤先生・加藤先生はじめ諸先生方の名文を読ませていただきました。

編集委員の御苦勞に感謝致します。

静岡市大谷三八〇―九二

一方井 卓四郎

(八・十二・十四)

このたびはまた「波久鳥」をお送りいただきまして誠にありがとうございます。

五年半ほど勤めておりました室蘭保健所を定年退職しましてから、三年ほどになりますが、楽しく過ごさせていだいた室蘭時代のことを時々なつかしく思い出しております。この「波久鳥」でもいろいろとお世話になりましたなつかしい先生方のご投稿を本当に興味深く読ませていただきました。どうもありがとうございます。

ございました。

先生方のご健勝をお祈り申し上げます。

札幌市厚別区厚別西二条五丁目一十

勝俣 哲男

(八・十二・二十三)

拝復

向寒の砌り弥々御清祥御活躍の御様子
慶賀申し上げます。

扱て此度は「波久鳥」を御恵送下さい
まして誠に有難う御座居ました。早速隔
から隅迄懐かしく拝読させていただきま
した。

室蘭市医師会また波久鳥編集諸先生の
ますますの御活躍を祈念申し上げて居り
ます。

来年が良い年でありますように・

敬具

札幌市中央区宮の森一条

十五丁目一番十五号

小國 親久

(八・十二・二十)

波久鳥十七号お送りいただき誠にあり
がとうございます。高島信治さんの「中
村秀先生との想い出」を読みながら、平

成五年八月三日、ホテル・セピアスで行
なわれた「八木義徳先生を囲む座談会」
で一緒にさせていただいた折に触れた、
八木先生と中村先生の明治生れの男の友
情の暖かさをふと思い出しておりまし
た。

室蘭市幕西町一番一号

稲月 螢介

(九・一・十五)

親交会のおもな行事

○ 受賞祝賀会及び忘年パーティー

平成八年十二月十三日

於 室蘭プリンスホテル

○ 平成九年度定期総会・懇親会

平成九年五月二十二日

於 ホテルサンルート室蘭

○ 行楽会

平成九年七月二十四日

於 レストランテ・カリーナ

○ 親睦旅行

平成九年十一月二十二～二十四日

於 沖繩

会 員 異 動

平成8年10月～平成9年10月

年・月	事由	氏名	医療機関名
9・4	入会	千葉 泰二	三愛病院
9・4	入会	大平 整爾	日鋼記念病院
9・4	入会	大宮 彬男	室蘭保健所
9・4	入会	松田 史明	とんけし耳鼻咽喉科ク
9・8	入会	松村 茂樹	市立室蘭総合病院
9・9	逝去	徳田 敬太郎	徳田小児科医院
9・10	入会	佐々木 裕一	室蘭太平洋病院
9・10	逝去	米澤 堡	米澤医院

平成9年10月末現在会員109名

編集後記

ハールの日本大使館がゲリラに襲われて大勢の人質が監禁されたままで迎えた一九九七年でした。阪神淡路大震災といい、オウム事件といい、このところ予想もしない大事件で年明けが続きます。世紀末には大きな異変に見舞われるというジンクスも半分信じたくなるような気がします。

ただ二十世紀半ばで消滅した神國日本が地球上の最大の悪魔、戦争からどうやら逃れて残りの半世紀を過ごせたのは素直に喜びたいと思っています。敗戦、終戦を契機として民主、自由、平和の旗を掲げて新生日本は再出発しました。全てが新しいスタートを切りました。日本医師会も民主化されて一九四七年を創立と決めたので地方の大部分の医師会も今年が創立五十周年となります。医師会より五年遅れて室蘭市医師親交会が誕生しました。今年が四十五年に当たります。「波久鳥」は十八年目を数えます。夫々に新たな歴史が年毎に刻まれて来ています。さて本号はご覧の通りの新・古参の諸

先生から色々な分野で投稿して頂き、寝ころび乍ら（失礼）読むのには丁度よい小冊子が出来上がりました。また今年は新しい会員も増えましたので次号からは非「波久鳥」に寄稿下されますように今からお願ひしておきます。その他、旅行、パーティ等の行事にも参加してください。

この秋、徳田敬太郎先生（九月）米澤堡先生（十月）池田洋二先生（十一月）と親交会創始からの先輩が相次いで逝かれました。「波久鳥」にも度々登場願った方々です。本誌には三先生の思い出が記されて残ります。心からご冥福をお祈りいたします。

親交会五十周年は既に二十一世紀に入っています。このところの不況、低金利が長引いていて親交会の運用資金も甚だ窮屈なのですが、五十年目の節目には会員ごぞつて盛大に祝賀行事を催したいと願っております。

（大久保洋平記）

「波久鳥」十八号編集委員

加藤 治良
村井 乙
澤山 豊
上田 智夫
大久保 洋平
三村 博通
斉藤 甲斐之助
事務局 高橋 則夫
小杉 修一

親交会会誌 波久鳥

発行日 平成九年十二月五日

発行所 室蘭市医師親交会

印刷所 室蘭印刷株式会社